

# 筑波大学生の運動生活に関する調査

山川岩之助, 寄金 義紀, 宮丸 凱史, 田崎健太郎  
安ヶ平 浩, 木原 資裕, 永木 耕介

## A Study on the Physical Activities in Daily Life of University Students

Iwanosuke YAMAKAWA Yoshinori YORIKANE Masashi MIYAMARU  
Kentaro TAZAKI Hiroshi YASUGAHIRA  
Motohiro KIHARA Kosuke NAGAKI  
(Sport and Physical Education Center  
of the University of Tsukuba)

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the physical activities in daily life of students at University of Tsukuba using a questionnaire.

4200 students who were enrollment for regular physical education classes served as the subjects. Effective number of the samples was 3150 (male 2284, female 866, recovery rate was 75.0%).

The types of the physical activities in daily life of the students were classified into four typical classes, i.e. Club-class, Area-class, Program-class and Stay-class, according to the category defined by Udo (1970).

Four typical classes were characterized as follows:

1) The students of the Club-class were members of organized sport clubs in the University. 2) The students of the Area-class enjoyed relatively constant physical activities using the sport facilities during free-activity period, however these might not be well-organized as group activities. 3) The students of the Program-class had physical activities as the participants of regular sport programs in the University. 4) The students of the Stay-class did not have any physical activities except the exercises in regular physical education class.

Percentages of the Club-class, the Area-class, the Program-class and the Stay-class in the samples were 41%, 23%, 8% and 29%, respectively.

Progressing school year the percent of the Club-class gradually decreased from 49.2% to 36.7% for male and 37.2% to 27.9% for female while the percent of the Area-class gradually increased from 19.3% to 28.6% for male and 24.6% to 27.1% for female.

The Stay-class increased 4.5% upto 27.3% for male and 15.5% upto 42.6% for

female from the sophomore to the senior.

These results pointed out that one of the important problems that physical education service face was to decrease the number of the students belonging to the Stay-class.

The responses of the students to the club service, the area service, the program service and the regular physical education class were grasped in detail.

And their responses suggested that it was necessary to improve physical education services to activate the physical activities in daily life of the students.

## 緒 言

筑波大学の体育センターは、学生に対してスポーツの生活化、ひいては生涯スポーツのための教育をめざして正課体育をはじめ各種の体育事業を提供しており、筑波大学における体育経営体として発足以来、すでに10年の歩みを続けてきた。

この間、正課体育の4年間履修を通して、学生が意図的に運動することを現在および将来にわたって自己課題化し、自発的に実践できるように働きかけると同時に、学生の積極的なスポーツ活動の実現のために、施設、仲間、プログラム、指導者、公報、などについてさまざまな条件整備を図ってきている。

しかしながら、近年学生のスポーツ欲求の高まりや活動選好の多様化がみられ、10年を経た今日これらの体育事業の再検討が求められている。

こうした体育事業を見直すためには、体育事業の対象となる運動者<sup>1)</sup> — 現在運動をしている人に限らず、これから運動するであろう人、運動してほしい人を含めた全対象 — の実態を知悉しておくことが必要であろう。すなわち、学生の運動生活<sup>2)</sup>の様子、いいかえれば、学生が日常生活の中で意図的に運動することをどのように取り入れ、定着させているか、を把握しておくことである。

大学内における学生の運動への対応のしかたは、ほかでもなく学内の体育事業のあり方との関連で生起するところが多いと考えるか

らである。

したがって、これまでの体育事業の役割やその効果を吟味するには、学生の日常生活における運動者行動とその経年的変容を知っておく必要がある。

こうした観点から、体育事業のあり方を見直すとともに、その改善の手がかりを得ることを目的として、筑波大学生の運動生活に関する調査研究を実施した。

今回の調査研究における学生の運動生活のとらえ方および運動生活の類型についての基本的な考え方は、宇土の理論<sup>3)</sup>に依拠したものである。すなわち、学生の運動生活が基本的な体育事業であるクラブサービス、プログラムサービス、エリアサービス、正課体育の授業、とどのようなかかわりを持っているかによって、運動生活およびその類型や階層をとらえるものである。

正課体育の授業は、本来直接的体育事業におけるプログラムサービスのひとつとして位置づけられるが、4年間履修を義務づけている本学の正課体育が学習プログラムとしての重要な機能を果たしていることを考慮して、ここではあえて別に取りあげたものである。

また、今回の調査研究は、体育センターが昭和56年6月に行った第1次の運動生活調査の結果<sup>4)</sup>(大学体育研究、第4号、1982)を踏まえ、その調査内容を改めるとともに、サンプル数を増加させて実施したものであり、昭和57～58年度の体育センター共同研究の一

部としてなされたものの報告である。

調査項目の構成は図1のようであった。

### 調査方法

調査は質問紙法による悉皆調査であった。

調査対象は正課体育受講学生(体育専門学群の学生を除く)のうち、本学での生活経験が1年以上あり質問の意図や内容を理解し得る2年生以上であった。

「運動生活に関する調査」(巻末資料-II参照)を対象学生4,200名に配布し、昭和58年4月にそれぞれの正課体育授業時に集団面接聴きとり法によって調査がなされた。

回収率は75%、サンプル総数は3,150であり、性別、学年別、学群別のサンプル数は表1のようであった。

集計には本学の大型電算機を用い、調査項目についての一般的傾向を知るために、まず単純集計を行った。さらに項目間の因果関係や要因間の類縁関係を知るためにクロス集計を適用した。

表1 性別、学年別、学群別標本数

性別	男		女		計	
	2,284 (72.5%)		866 (27.5%)			3,150 (100%)
学年別	2年	3年	4年	計	3,150 (100%)	
	1,141 (36.2%)	1,010 (32.1%)	999 (31.7%)			
学群別	第一学群	第二学群	第三学群	医学専門学群	芸術専門学群	計
	987 (31.3%)	922 (29.3%)	865 (27.5%)	206 (6.5%)	170 (5.4%)	

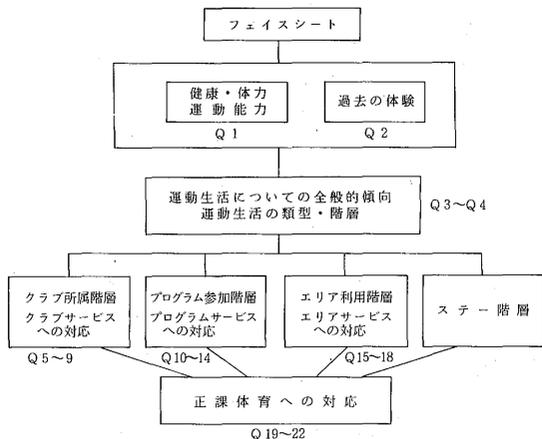


図1 運動生活に関する調査の構成

### 結果と考察

#### 1. 運動生活の類型的・階層的把握

筑波大学では学生に対してスポーツの生活化をめざして正課体育をはじめ各種の体育事業を提供している。したがって、多くの学生の運動生活はこれらの体育事業との関連において営まれているといえる。

そこで、ここでは学生の運動生活の現状を明らかにするため、大学における体育事業との関連において彼等の運動生活の様相を把握することにした。

具体的には、筑波大学生の運動生活を類型的・階層的に把握するとともに、その経年的な変容をみることによって、運動生活の全体的な特徴をとらえようとするものである。これは、今後の大学における体育事業の検討に有益な示唆を与えることになると考えられる。

#### 1) 運動生活の類型と階層

##### (1) 運動生活の類型

学生の運動生活の特徴を把握するためには、大学における体育事業に対して個人個人がどのような対応のしかたをしているかを明らかにすることが必要である。筑波大学生の運動をめぐる生活のみをみると、運動クラブやサークルに所属している者、あるいはスポーツデーのような体育的行事に参加している者、大学の体育施設や構内の空地、広場などの関係的运动施設を利用して運動を楽しむ者、また、運動クラブに所属して体育的行事に参加する者などさまざまな運動行動をとっている。

そこで、運動生活の類型のとらえ方は、体育事業との関連で運動行動をみようとする表2に示すような宇土の分類<sup>5)</sup>による8類型によることとした。

実際の調査では、表3のA, B, C, Dの体育事業に対する8つの運動行動から運動生活の類型をとらえた。調査の結果は表3のとおりであった。

表2 運動生活の類型

体育事業／運動生活の類型	1	2	3	4	5	6	7	8
C.S (クラブ・サービス)	○	○	○	○	△	△	△	△
P.S (プログラム・サービス)	△	○	△	○	○	○	○	△
A.S (エリア・サービス)	△	△	○	○	△	○	○	△

1…クラブ運動者としての生活 (C)  
 2…クラブ運動者であると同時にプログラム運動者としての生活 (C・P)  
 3…クラブ運動とエリア運動者が組み合った運動者としての生活 (C・A)  
 4…クラブ運動者、プログラム運動者、エリア運動者の三つが組み合った運動者としての生活 (C・P・A)  
 5…プログラム運動者としての生活 (P)  
 6…プログラム運動者とエリア運動者としての生活 (P・A)  
 7…エリア運動者としての生活 (A)  
 8…いずれの体育事業にもかかわりのない Stay 運動者 (S)  
 (宇土正彦, 体育管理学, 大修館書店 1970 による)

表3 筑波大学生の運動生活の類型別の割合

体育事業	運動生活の類型								計
	1	2	3	4	5	6	7	8	
A 体育系の課外活動団体に所属して運動している	○	○	○	○	×	×	×	×	(1, 2, 3, 4) 41 (%)
B スポーツデーやスポーツ教室などの体育的プログラムに参加して運動している	×	○	×	○	○	○	×	×	(2, 4, 5, 6) 44 (%)
C 自由時間に運動の施設や用具を利用して、自由なやり方で運動を楽しんでいる	×	×	○	○	×	○	○	×	(3, 4, 6, 7) 42 (%)
D 現在は正課体育の授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない	×	×	×	×	×	×	×	○	(8) 29 (%)
全 体 (%)	10	12	6	13	8	11	12	29	
男 (%)	11	13	6	14	8	11	11	26	
女 (%)	8	11	6	9	7	9	15	36	

筑波大学生の運動生活の類型別の割合(%)は表3の下段に示した数字である。

1から7までの類型について比較してみると、類型4のクラブやサークルに所属し、体育的プログラムにも参加し、さらに自由時間に体育施設を利用して運動を楽しんでいる者(全体の13%—男14%, 女9%)が比較的多く、次いで類型2のクラブやサークルに所属し、体育的プログラムにも参加している者(全体の12%—男13%, 女11%)と類型7の自由時間に体育施設を利用して運動を楽しんでいる者(全体の12%—男11%, 女15%)が多くなっている。これに対して、類型3のクラブやサークルに所属し、さらに自由時間に体育施設を利用して運動を楽しんでいる者(全体の6%—男6%, 女6%)と類型5の体育的プログラムに参加する者(全体の8%—男8%, 女7%)は少なくなっている。

次に、1～7までの類型と8の類型を比較

してみると、8類型の正課体育以外は意図的な運動をほとんどしない者(全体の29%—男26%, 女36%)のほうが極めて多く、全体の30%近くいることが明らかになった。

また、1～7までの類型を男女の別で比較してみると、各類型とも男子の割合が上廻っている。次に男女別にみると、男子では4, 2の類型の者が多く、ついで1, 6, 7の類型の者が同じ割合で多くなっている。女子では、7, 2の類型の者が多くなっている。男女とも3, 5の類型の者は少ない。

8類型だけについてみると、男子よりも女子のほうが10%多くなっている。

前述の各類型を体育事業ごとにとらえてみると、表3右の欄の計に示されるような数字であった。すなわち、運動クラブやサークルの所属者は全体で41%、スポーツデーなどの体育的プログラムへの参加者44%、自由時間に体育施設を利用して運動を楽しんでいる者42%、正課体育の授業以外意図的な運動を行わない者29%であった。

以上のことから、筑波大学生の運動生活の類型にみられる概括的な傾向は、8の類型のような運動に対して極めて消極的な対応のしかたを示す者も30%近くいるが、70%以上の者は、一つまたは二つ以上の体育事業とのかわり合いにおいて運動に対して自発的な行動を示している。

(2) 運動生活の階層的なとらえ方

運動生活の類型のとらえ方は、体育事業との関連のしかたによる運動行動の分類に基づくものであった。しかし、このように類型化しただけでは、運動生活の体育的な意義づけとの関係を検討するのに十分であるとはいえない。この関係を明らかにするためには、どんな類型が望ましいのか、また望ましい運動生活はどのような構造をもっているのかなど、このことも検討される必要があると思われるが、ここでは、望ましい運動生活を成立させるために必要な体育的意義のある条件との関係で階層をとらえることとした。

このような運動生活の階層的なとらえ方の基礎条件として、宇土<sup>6)</sup>は「継続性」、「組織性」、「合理性」の三つをあげ、これらの条件の含まれる程度によって、Club階層、Program階層、Area階層、Stay階層の四つに分けている。しかし、Program階層とArea階層のいずれが三条件からみて優れているのかという考え方の相異によってA案、B案の二つが考えられるとしている。両案とも、類型1～4のように三条件が最も含みやすいClub階層を第1階層としている。しかし、第2階層と第3階層の位置づけ方でA案とB案とで違いがある。A案ではProgram階層を第2階層とし、B案ではArea階層を第2階層としている。この相異は運動欲求の強さをProgram階層がすぐれているとみるのがA案であり、「継続性」の条件はArea階層がすぐれているとみるのがB案であるとしている。

第4階層は両案とも三条件をほとんど含まないStay階層としている。

筑波大学生の運動生活の現状からみると、恵まれた体育施設を利用して運動が日常的に行われており、継続性の条件が含まれやすい運動生活をもっている。これに対し、大学が提供している体育的プログラムは年2回のスポーツデーが主なもので、単発的・行事的なプログラムでスポーツの楽しさやスポーツへの意欲を高める特徴はあるが、継続性の条件

は少ない。

したがって、ここでは宇土<sup>6)</sup>のB案によって、第1階層をClub所属階層(類型1, 2, 3, 4)、第2階層をArea利用階層(類型6, 7)、第3階層をProgram参加階層(類型5)、第4階層をStay階層(類型8)とする四階層のとらえ方にすることとした。

調査の結果からみると、階層別の割合は次のようであった。

第1階層(Club所属階層) 41%(男44%, 女34%)

第2階層(Area利用階層) 23%(男22%, 女24%)

第3階層(Program参加階層) 8%(男8%, 女7%)

第4階層(Stay階層) 29%(男26%, 女36%)

運動生活の階層の傾向を概括的にみると、運動生活の類型の場合と同様、正課体育以外はほとんど意図的に運動をしない第4階層が30%近くもあるが、70%以上は体育的意義を含みやすい第1～第3の階層である。特に第1階層の運動クラブやサークルに所属して活動している者の層が多いことは注目に値することである。

次に男女別にみると、第1階層と第3階層では男子が多くなっているが、第2階層と第4階層では女子が多くなっている。特に第4階層で女子が10%も多くなっていることは問題である。このStay階層の減少のためには、大学における体育事業の再検討が必要とされよう。

ところで、これまでに一般大学生の運動生活について調査した報告は見あたらないが、高校生(標本数2,115名)を対象として運動生活を階層的に把握した福岡県体育研究所の研究報告<sup>7)</sup>が注目される。

この報告によれば、高校生の運動生活の階層別の割合は、第1階層(Club所属階層)27.3%(男子32.9%, 女子21.8%),第2階層(Area利用階層)8.5%(男子14.3%, 女子1.7%),

表4 学年・性別にみた運動生活類型(%)

性別	学年	類型								計
		1	2	3	4	5	6	7	8	
男	2年	10.1	17.4	5.4	16.3	8.2	10.6	8.7	22.8	100
	3年	14.2	10.7	5.7	13.1	8.4	11.0	8.0	28.9	100
	4年	8.2	9.0	6.6	12.9	7.3	12.6	16.0	27.3	100
女	2年	7.0	13.7	4.9	11.6	10.9	11.6	13.0	27.1	100
	3年	9.6	12.0	4.8	10.7	5.8	6.5	12.7	37.8	100
	4年	6.1	7.8	7.0	7.0	2.5	7.4	19.7	42.6	100

第3階層(Program参加階層)36.2%(男子23.7%, 女子48.6%), 第4階層(Stay階層)28.0%(男子28.1%, 女子27.9%)であった。

対象および体育事業の違いはあるものの、共通の階層的なとらえ方によるデータであり、あえて今回の調査結果と比較してみると、まず、筑波大学の学生の方が、Club所属階層がやや多く、Area利用階層ではとりわけ多いことが判る。一方、Program参加階層は高校生が36.2%に対して筑波大生はわずか8%にすぎなかった。しかし、Stay階層はともに28~29%でほとんど差が認められなかった。これらの比較は、筑波大学における体育事業の特徴、すなわち、恵れたエリアの条件、学生のニーズに応じて成立している多種多様なクラブ(同好会・運動部)の存在、単発的な年2回の開催にとどまっているプログラムの問題、などが学生の運動生活にプラスの面にもマイナスの面にも反映していることが推察される。また、同時に主として自発的な運動行動による大学生の運動生活の状況と、主として学校教育活動の一環としてなされる高等学校の体育事業に依存する高校生の運動生活の違いをも示唆しているといえよう。

## 2) 運動生活の階層の学年別・性別の変容

運動生活の階層を単に層化してみるだけでなく、その経年的な変容がどのようにになっているかを確かめることも、学生の運動生活をより具体的に把握するために必要なことである。

表4は、運動生活の8類型が学年によってどのように変容していくかを示したものである。表5は、表4の結果から運動生活の階層の学年による変化をみたものである。

各階層別にみると、Club所属階層は高学年になるにしたがって減少しており、特に4年次における減少が著しい。Area利用階層は3年次に減少し、4年次に増加している。このことは、表4の類型1, 2, 4が3年次に相当多く、類型6, 7の3年次が減少していることによるものであるといえよう。

次にProgram参加階層はほぼ高学年になるにしたがって減少しているが、特に女子の減少が著しい。Stay階層もほぼ学年進行にしたがって増加しているが、女子の増加は特に著しく40%強の数字を示している。

以上のことから、運動生活階層の経年的変容を概括的にみると、個人の生活時間を拘束される運動クラブやサークル活動から個人の自由な時間に大学の体育施設や近くにある運動施設を利用して運動を楽しむ方向への変化がみられた。

Program参加階層の経年的減少とStay階層の経年的増加はともに問題であり、体育的プログラム提供の改善とその他の体育事業の検討が必要であることを示唆している。

表5 運動生活階層の経年的変化(%)

性別	学年	階層	Club所属階層	Area利用階層	Program参加階層	Stay階層	計
		(第1階層)	(第2階層)	(第3階層)	(第4階層)		
男	2年	49.2	19.3	8.2	22.8	100	
	3年	43.7	19.0	8.4	28.9	100	
	4年	36.7	28.6	7.3	27.3	100	
女	2年	37.2	24.6	10.9	27.1	100	
	3年	37.1	19.2	5.8	37.8	100	
	4年	27.9	27.1	2.5	42.6	100	

## 2. 運動者の主体的条件

— 健康・体力・運動能力に対する自己評価  
と関心度、およびこれまでのスポーツに対する  
姿勢について —

運動者の健康や体力の水準、および過去の  
スポーツに対する姿勢や経験などのような主  
体的条件は、運動生活に大きく関与するもの  
と思われる。ここでは、健康や体力・運動能  
力について自己評価させるとともに、それら

に対する関心度を聞き、また、運動に対する  
これまでの姿勢を調査した結果を運動生活階  
層別に考察するものである。

### 1) 健康・体力・運動能力に対する自己評価 と関心度

健康や体力・運動能力に対する自己評価及  
びそれらに対する関心度についての学生の全  
般的傾向は図2のようであった。健康である  
と答えた者は、全体の36%であり、体力・運

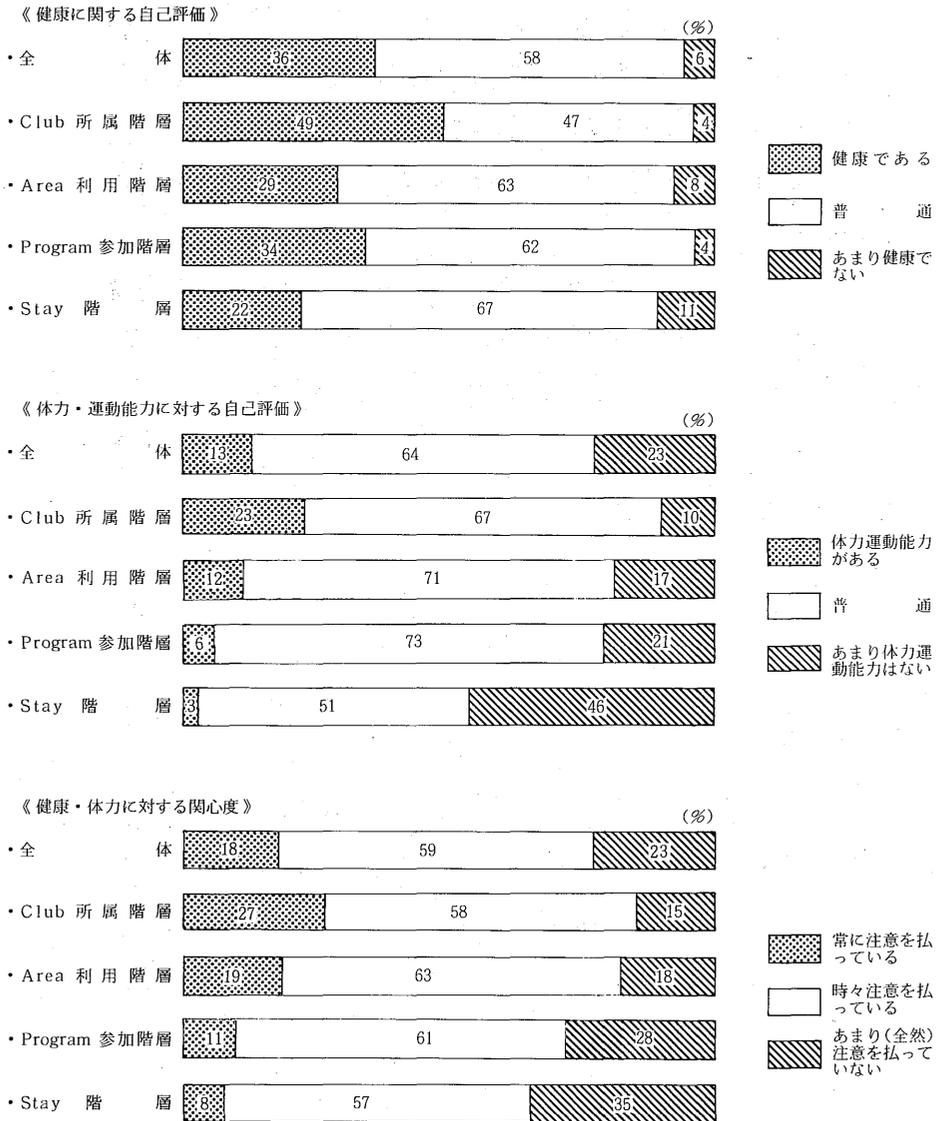


図2 健康・体力・運動能力に対する自己評価・関心度と運動生活

動能力があると答えた者はわずかに13%であった。また健康・体力に常に注意を払っていると答えた者は、18%にすぎなかった。健康や体力に対する意識や関心も低く、体力や運動能力についてもあまり自信がない様子がかがえる。

## 2) 運動生活階層別にみた健康・体力・運動能力に対する自己評価と関心度

図2はまた、健康や体力・運動能力に対する自己評価及び関心度について、各運動生活階層別にみた結果をも示している。

健康に対する自己評価において、健康であると答えた者の割合は、Club所属階層では約半数の49%であったが、Area利用階層で29%、Program参加階層で34%、Stay階層で22%であり、運動生活が消極的な階層ほどその割

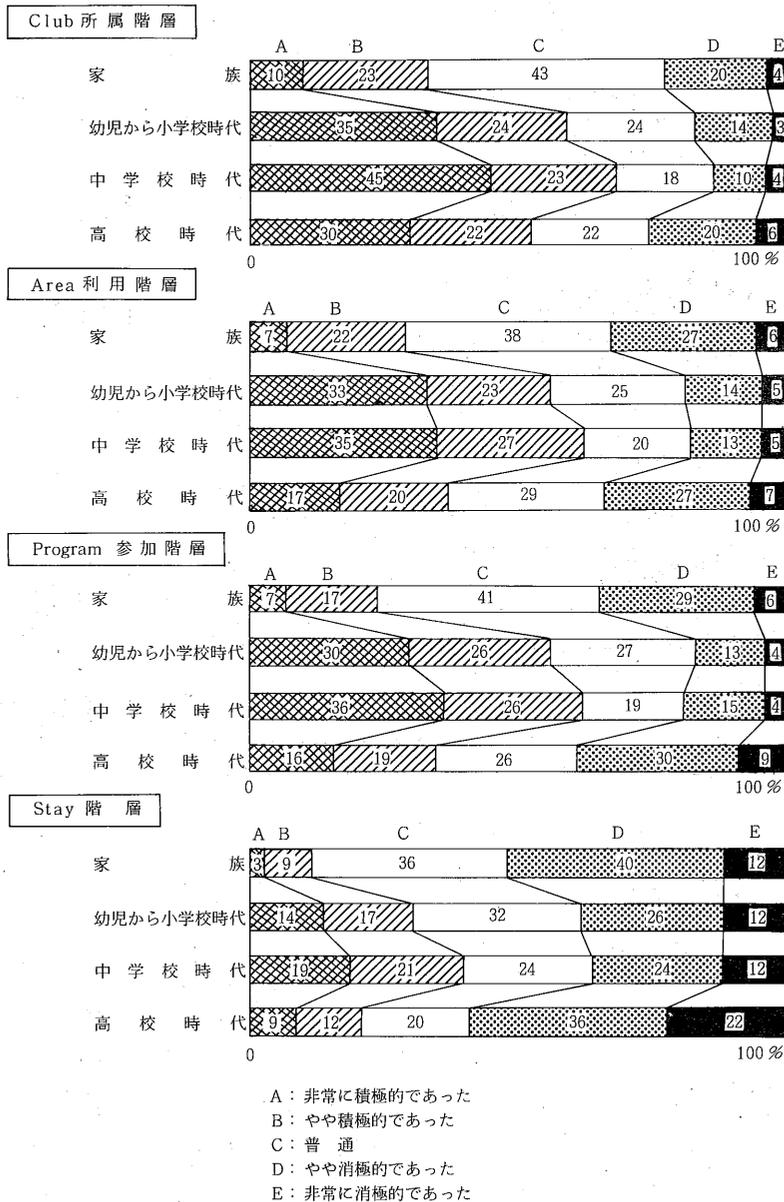


図3 運動生活階層別にみた過去のスポーツに対する姿勢

合が減少することがわかる。

また体力・運動能力に対する自己評価においては、体力・運動能力があると答えた者の割合は、Club所属階層の23%、Program参加階層の12%に対してArea利用階層やStay階層では3~6%と極めて少なかった。また、Stay階層では、あまり体力・運動能力がないと答えた者が46%と約半数を占めていることが注目される。

これらの結果は、運動者の健康や体力の水準が運動生活と関わりがあり、運動生活の階層によって健康や体力の状況が異なることを示唆している。

健康や体力に対する関心度においては、健康・体力に常に注意を払っていると答えた者の割合は、Club所属階層が27%ともっとも多く、Stay階層は8%ともっとも少なかった。一方あまり(全然)注意を払っていないと答えた者の割合はStay階層が35%ともっとも多く、Club所属階層が15%ともっとも少なかった。すなわち運動生活において積極的な階層ほど健康や体力に対する関心が高く、注意を払っているものが多い傾向がとらえられた。これらの結果は、椿本<sup>8)</sup>らの報告と一致するものであった。

### 3) 運動生活階層と過去のスポーツに対する姿勢

図3は、家族の運動・スポーツに対する姿勢、および学生の幼児から小学校時代、中学校時代、高校時代における運動・スポーツに対する姿勢について調査した結果を運動階層別に示したものである。

全体的な傾向として、各階層とも中学校時代には運動・スポーツに対して積極的な者の割合がもっとも多く、高校時代になって積極性はかなり低下するとみられる。とりわけStay階層では58%が高校時代に消極的であったと答えている。各階層ともに高校時代の状況が、中学校時代までと大きく変化するのは、受験勉強を含め、高校時代の生活や学習活動のあ

り方の問題を示唆している。

家族の運動・スポーツに対する姿勢についても積極的であったと答えた者の割合は、Club所属階層が33%でもっとも多く、Area利用階層、Program参加階層、Stay階層の順で少なくなり、反対に消極的であったと答えた者の割合は、Stay階層では52%と多く、運動生活からみて積極的な階層ほどその割合は少ない結果であった。

これらの結果は、過去のスポーツに対する姿勢、あるいはスポーツ経験の違いが、現在の運動生活とかなり関連を持っていることを示しており、とりわけ、Club所属階層とStay階層にみられる過去のスポーツに対する姿勢の違いは顕著であった。

### 3. クラブ所属階層の実態と運動クラブ所属に対する抵抗条件

本調査は、体育専門学群を除いた学生を調査対象としたものである。したがって本調査のClub所属階層(以下「Club階層」という)が所属する多くのクラブは、次のような特徴を持っていると考えられる。

- ① 体育専門学群の学生が所属していないクラブや体育専門学群の学生の所属が少ないクラブ
- ② 対外競技(試合)が比較的少ないクラブ
- ③ 競技レベルがやや低いクラブ
- ④ レクリエーション的な活動を主たる目的としているクラブ

これらの特徴をもつクラブに所属するメンバーについて、次のような事項を検討する。

- ① 運動者行動の実質性・形式性に着目し、実質的なクラブ運動者と形式的なクラブ運動者との間に、どの程度クラブ活動に満足しているか、クラブ活動を通してどのような要因に満足や不満足を感じているか、クラブ活動上どのような問題点を感じているか、について相違がみられるか。

- ② クラブに所属していない大学生は、クラ

ブにどのような抵抗条件をもっているか、また、これらの大学生がクラブ運動者となり得るかどうかの可能性についても検討を加える。

### 1) クラブ所属階層の全体的な傾向

Club 階層は、本調査のサンプル数の41%である。これらを性別、学年別、運動生活の類型別にみたのが図4である。学年別にみると、2年生が40.6%、3年生が32.6%、4年生が26.8%であった。したがって、Club 階層は学年が進行するにつれて減少する傾向にある。また、運動生活の類型別にみると、クラブに所属する以外に、スポーツデーやスポーツ教室に参加したり、個人的に自由に施設を利用して運動を楽しんだりしているもの(類型2、

図4 運動クラブ所属階層の実態

性別		100%	
男子	76.8%	女子	23.2%
学年別			
2年	40.6%	3年	32.6%
		4年	26.8%
類型別			
類型1	24.3%	類型2	29.7%
類型3	14.2%	類型4	31.6%

3、4)が約76%とかなり多いことがわかる。

### 2) 実質的な運動者と形式的な運動者

運動クラブ所属の個人的な目的やクラブの目的を達成するためには、クラブのメンバーがクラブの運営に積極的に参画し、また定期的に継続的に練習に参加することが重要な要件であると考えられる。すなわち、クラブの

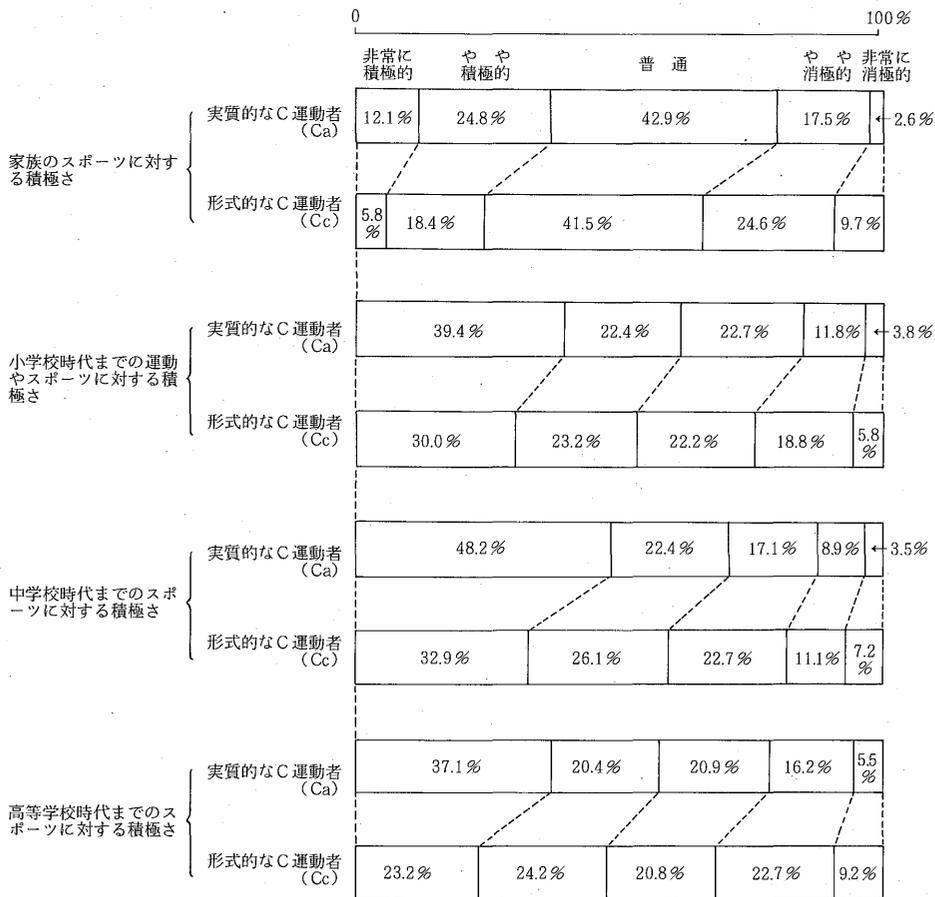


図5 練習への参加状況と過去のスポーツに対する対応

活動に対してどのような運動者行動をとっているかが重要な課題である。

ここでは、運動者行動の実質性・形式性に着目し、その区分けを1週間当りの練習への参加日数でとらえることとする。

参加日数は、①週に3日以上参加する者が47%、②週に1～2回の者が38%、③月に1～2回またはほとんど出ない者が16%であるすなわち、85%以上の者がweekly型の運動生活を送っている。

宇土<sup>9)</sup>は、運動者の活動と体育事業のねらいとの関係から、効果が期待できるものを実質的な運動者、そうでないものを形式的(名目的)な運動者として区別し、併せて実質的な運動者かどうかの判定は困難であるとしている。確かにweekly型の運動生活でも練習日数と目的との関連から運動効果(クラブ所属の効果)も変わってくると思われるが、ここでは実質的な運動者と形式的な相違を考察しやすいように両極をとり、上記の①を実質的な運動者(以下「Ca」という)、③を形式的な運動者(以下「Cc」という)とする。

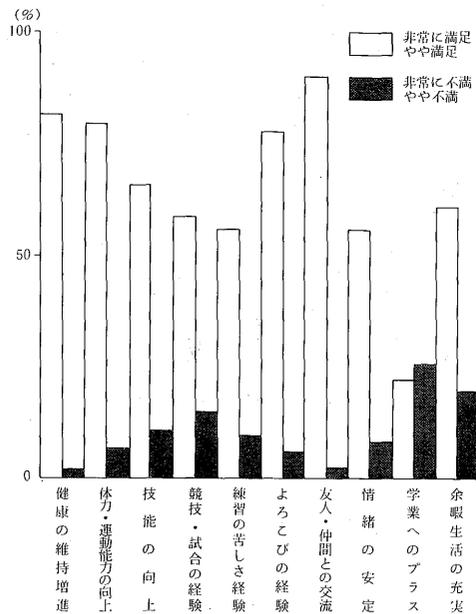


図6 実質的なC運動者(Ca)とクラブ活動における成果

表6 現在のクラブ活動に対する満足度(%)

	非常に満足	やや満足	普通	やや不満	非常に不満
実質的なC運動者	33.9	37.4	21.4	7.0	0.3
形式的なC運動者	7.9	11.9	49.5	21.3	9.4

図5は、過去のスポーツに対する対応状況について、CaとCcを比較したものである。各年代ともCaの方がCcに比べてスポーツに積極的に取り組んでいた傾向がみられる。Ccでは、消極的な傾向にあった者が中学校時代の約18%から高等学校時代の約32%と大幅に増加している。

### 3) クラブ活動における成果

表6は、クラブ活動を通してどの程度の成果をおさめているかを5段階尺度による満足度によって測定したものである。Caでは、満足傾向にある者は約71%であり、不満を感じている者は約7%と極めて少ないのに対して、Ccでは、満足傾向にある者は、約19%、不満傾向にある者は約31%である。この結果は、クラブ活動において満足できないことが、形式的な運動者(Cc)となっている要因の1つであることを示していると思われる。

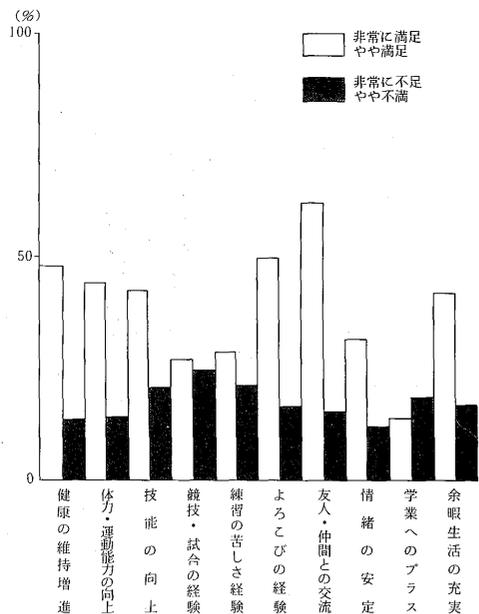


図7 形式的なC運動者(Cc)とクラブ活動における成果

図6・図7は、CaとCcのそれぞれについて、クラブ活動における満足・不満足をどのような具体的な要因によるものかをみようとしたものである。Caでは、「学業へのプラス」以外の項目では50以上の者が満足の傾向にある。特に「友人・仲間との交流」は90%、「健康の維持増進」は約81%、「体力・運動能力の向上」は約79%、「よろこびの体験」は約78%とかなり多くの者が満足の傾向にある。不満を感じる項目としては、「学業へのプラス」が約26%、「余暇生活の充実」が約20%であり、やや多い。

Ccでは、「友人・仲間との交流」(約62%)以外の項目に対しては、満足と感じる者の割合は50%以下である。とりわけ、「学業へのプラス」(約14%)、「競技・試合の経験」(約27%)、「練習の苦しさ経験」(約29%)は30%にも達していない。その反面、これらの項目や「技能の向上」などはやや不満の傾向にある。

図6・図7の結果から、次のようなことが

いえる。

- ① Caでは、クラブ活動を通して多くの要因によって満足感が得られている。しかし、練習に多く参加しているため、自由時間が減少し、学業への影響や余暇に他の活動ができないことに若干不満を感じている者がいる。
- ② Ccでは、全般的に満足度が低い。運動クラブの特徴が前述した①～④であるために、対外試合、ハードな練習、技能向上のための努力などの経験が少なく、物足りなさを感じてCcとなっている者も多いと推測される。

#### 4) クラブ活動における問題点

図8は、クラブ活動における問題点について、CaとCcのそれぞれについてみようとしたものである。

Caでは、「経済的負担」(約30%)、「学業への影響」(約39%)が最も多い。これはCaとしてクラブ活動に多く係われれば係わるほど付随

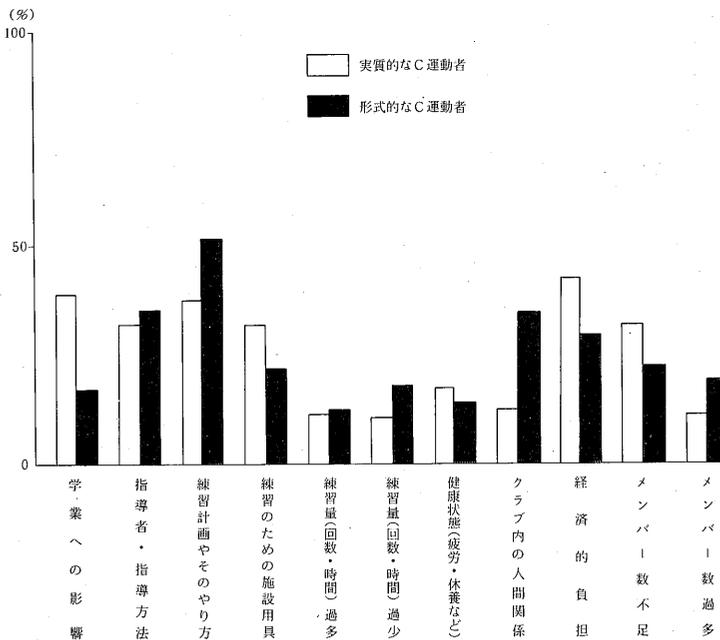


図8 クラブ活動における問題点  
(該当するものを3つ以内で選択させているため  
合計数は100%を越える)

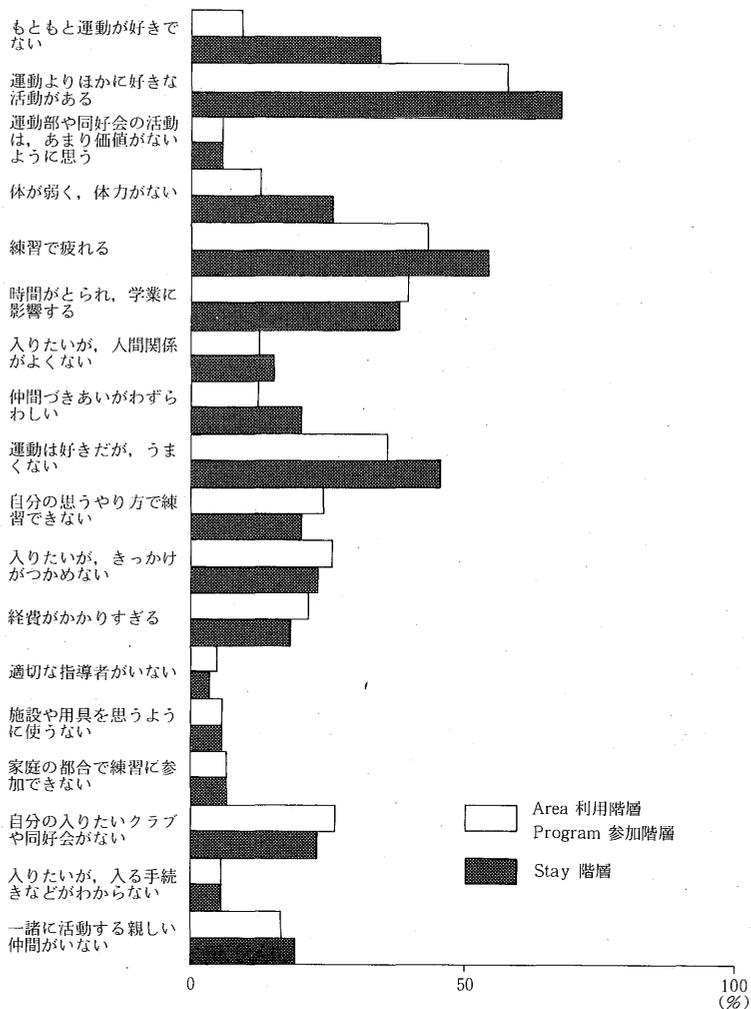


図9 クラブ所属に対する抵抗条件

して発生する悩みであろう。その次には、「練習計画やそのやり方」(約38%)、「指導者・指導方法」(約32%)などに問題が多い。これは、主に練習場面での問題であり、運動クラブの運営上、十分に改善の余地のある課題であると考えられる。また、練習を支える条件である「練習のための施設・用具」(約32%)、「メンバー数の不足」(約32%)も同じように多い。施設については、大学の体育施設の運用とも関連するものであり、メンバー数の問題はCcを減少させるような経営的な努力をすることによって、かなり改善できるとも考えられる。Ccでは、「練習計画やそのやり方」(約52%)

を問題点にあげる者が非常に多い。また、「指導者・指導方法」(約35%)も問題点となっている。このことはCaの傾向とも一致し、Ccではクラブ内の人間関係が影響しているように思われる。

図6・図7でも予測できるように、この調査の対象になった学生たちの所属するクラブでは、練習計画や練習方法にメンバーのニーズを十分に組み込む工夫と努力が必要であろう。

### 5) クラブ所属に対する抵抗条件

図9は、どのような要因が抵抗条件となってクラブに所属しないのか、それらの抵抗条

件が、クラブに所属しないで運動やスポーツをしている者(Area利用階層・Program参加階層)と運動を特に行っていない者(Stay階層)との間にちがいがああるかをみようとしたものである。

Area利用階層・Program参加階層とStay階層ともに30%以上の者が抵抗条件としてあげているものは「運動よりほかに好きな活動がある」、「練習で疲れる」、「時間がとられ、学業に影響する」、「運動は好きだがうまくない」など。学生自身の主体的条件に関するものであった。この学生の主体的条件は、スポーツに対する興味・関心の問題と体力・運動能力などの身体的条件に区分できる。

Stay階層に多くみられる抵抗条件としては、「もともと運動が好きでない」、「運動よりほかに好きな活動がある」、「身体が弱く体力がない」、「練習で疲れる」、「仲間づきあいがわずらわしい」、「運動は好きだが、うまくない」などである。全体的にみると、多くの項目において、Area利用階層・Program参加階層よりもStay階層の方が高い値を示している。Area利用階層・Program参加階層の方が、わずかな割合であるが多くみられる項目としては、「自分の思うやり方で練習でき

ない」、「入りたいが、きっかけがつかめない」、「経費がかかりすぎる」、「自分の入りたいクラブや同好会がない」など、体育事業や運営上の問題が抵抗条件となっていることがわかる。

#### 4. エリア利用階層の実態とエリアサービスの問題点

運動を実践することにおいて、運動施設との係わりは、運動生活を方向づける大きな要因であるといえよう。ここでは、Area利用階層の運動生活の実態とその問題点を明らかにし、エリアサービスの改善に役立てようとするものである。

##### 1) エリア利用階層の実態

「あなたは、この一年間に、自由時間に学内の運動施設を利用して、自由なやり方で運動を楽しんだことがありますか。」という質問に対して、「ある」と答えた者は全体の42%(1,323名)であった。このエリア利用者42%の中には、Club所属階層が含まれており、前述した宇土の階層区分によるArea利用階層は全体の23%(男子22%、女子24%)であった。

Area利用階層の実態を示すと図10のよう

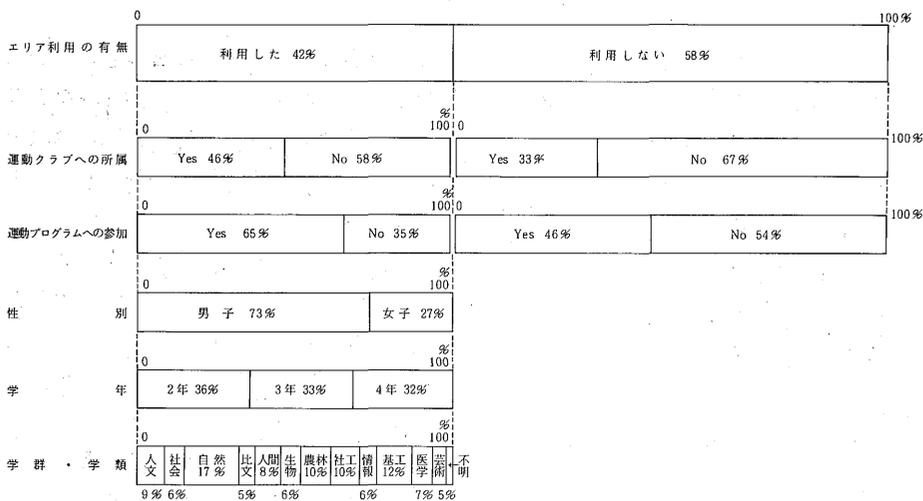


図10 エリア利用階層の実態

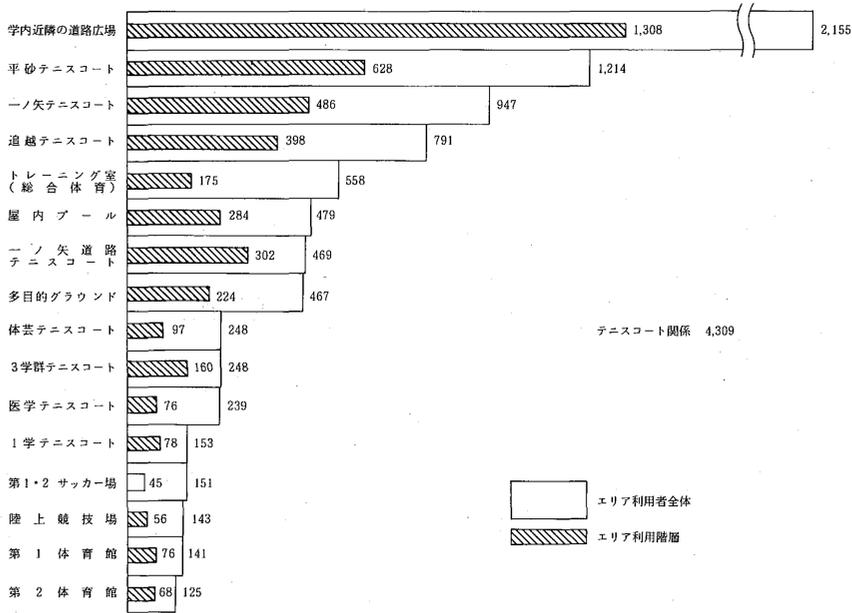


図11 エリア利用者の施設利用状況

であった。エリア利用者の約1/2が運動クラブに所属し、また約2/3の者が運動プログラムへ参加していることがわかる。性別で見ると、男子学生の占める割合が多いように思われるが、全体のサンプルにおける男女の割合(男子72%、女子28%)とほぼ同様であり、とくに性差があるとはみられなかった。また、学年別の割合は、学年が進むにつれてやや減少する傾向がみられるものの、学年間に著しい差はみられなかった。

## 2) エリアの利用状況

図11～15は、学内の運動施設利用者の利用場所、利用の曜日、利用の時間帯、利用頻度、施設利用時の運動の内容を示したものである。図中の数字は、それぞれの質問項目において、1位・2位・3位と順位をつけて3つを回答させたので、1位に3点、2位に2点、3位に1点を与え、数量化したものである。

### (1) 施設利用状況

図11はエリア利用者が自由時に使っている施設の状況を表している。「学内、近隣の道路や広場」がきわだって高い値を示している。

道路や広場はもともと運動以外の目的のための施設であるが、特に運動にも利用される場合には、宇土<sup>10)</sup>のいう「関係的運動施設」としてとらえられる。エリア利用者にとっては、日常生活の場にもっとも接近した手軽な場所として利用していることがうかがえる。このことは、平砂・一ノ矢・追越の学生宿舎内にあるテニスコートの利用が、「学内・近隣の道路や広場」に次いで多いことから、十分推察できる傾向である。これらの施設は、他の学内体育施設とちがって、使用願等を提出することなく、自由に使用できることが高い利用度を示した要因の1つといえよう。

宿舎内および学内体育施設としてのテニスコートすべてが、施設利用度の上位12の中に入っていることが注目される。これは、学内体育施設として27面、宿舎内に7面、合計34面のテニスコートがキャンパス中に用意されているという条件に加えて、学生の利用希望が多いことによるものといえる。

図11の中で、Area利用階層だけの利用度を斜線で表している。Area利用階層も、学

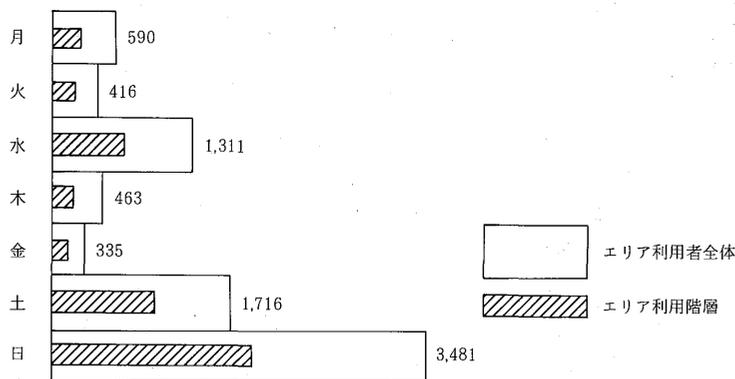


図12 利用の曜日

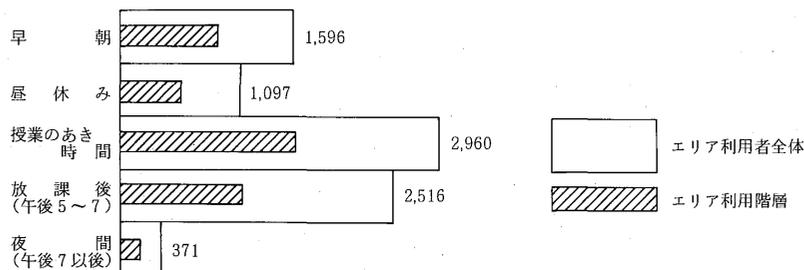


図13 利用の時間帯

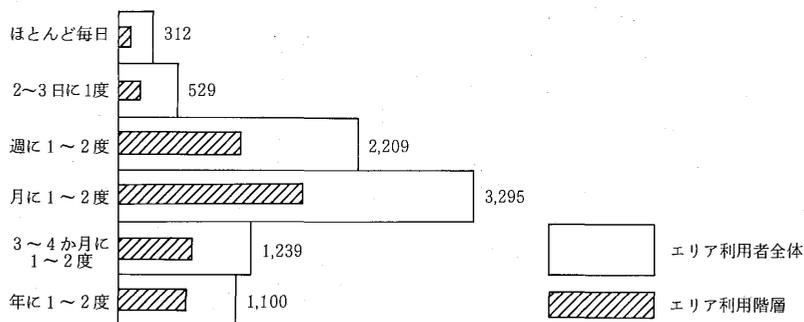


図14 利用の頻度

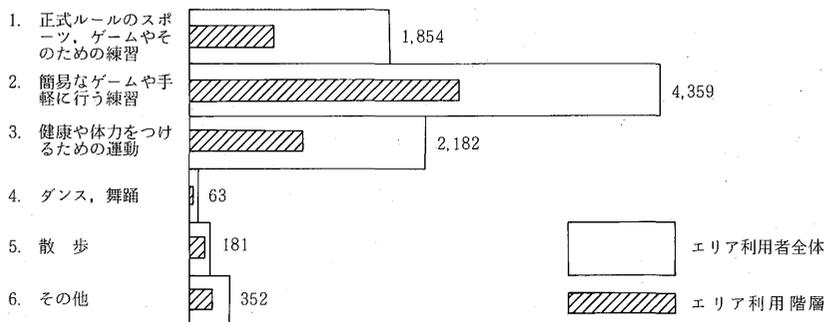


図15 施設利用時の運動の内容

内、近隣の道路や広場、宿舍内のテニスコートの順に高い値を示しており、全体としてはエリア利用者全体と同様の利用状況とみられる。しかしながら、Area利用階層の利用度が利用者全体に比べてとりわけ低い施設がみられる。たとえば、トレーニング室、体芸テニスコート、医学テニスコート、第1・2サッカー場、陸上競技場などがそれである。これらは、クラブ活動やその関連の自由練習時に利用される傾向が強く、エリア利用者のうち、クラブに所属している階層の利用度が高いことによるものとみられる。

### (2) 利用の曜日、利用の時間帯、利用の頻度、施設利用時の運動内容について

利用の曜日別では、「日曜」「土曜」「水曜」の順に多く、Area利用階層にとって、授業時間割が施設利用の曜日に影響を与えているといえよう。このことは、利用の時間帯においても同様であり、「授業のあき時間」「放課後」「早朝」といった順に使われており、授業時間とのかかわりが示されている。利用の頻度においては、「日に1～2度」「週に1～2度」が多く、施設利用時の運動内容としては「簡易なゲームや手軽に行う練習(キャッチボール、円陣パス、ストローク練習など)」が最も多い利用形態であった。

寄金ら<sup>14)</sup>が、「筑波大学体育施設の利用状況」を各施設ごとに報告している。その中で、利用団体の主なるものは、体育会に所属する「運動部」であるが、一般学生、特に有志的グループによる利用もかなり認められ、「空き時間帯」や「早朝」の利用が多く、また、これらのグループが定期的な練習の方向に進みつつあることを報告している。今後、こうしたArea利用階層の需要に応じた積極的なエリアサービスが検討されねばならないであろう。

### 3) エリア利用に対する抵抗条件と問題点

図16は自由時間に、自由なやり方でエリアを利用しなかった理由としてあげられた14項目に対して、「最もあてはまる」「ややあては

まる」と答えた者の割合が多い順に示したものである。「時間がとれない」「施設や用具を借りる手続きがめんどろである」「思うように場所が使えない」「運動より他の活動をしたい」などがエリア利用に対して抵抗となる主な理由であった。これらの理由の中には、大別して2つの要因がとらえられる。ひとつは、「時間がとれない」「運動より他の活動をしたい」「仲間や相手がみつけにくい」「運動がうまくないので気がすまない」など運動者自身の持つ主体的な要因である。もうひとつは、「施設や用具を借りる手続きがめんどろである」「思うように場所が使えない」「施設や用具を借りる手続きを知らない」といったようなエリアサービスのあり方と関連する要因であった。運動者の主体的な要因にかかわる抵抗条件を解消することは容易ではないが、エリアサービスのあり方にかかわる要因は検討可能な問題と思われる。そこで、現在のエリアサービスに対する学生の要望を調べた結果は図17のようであった。図中の数字は、図11～15と同様の方法で数量化したものである。この結果は、図16で示されたエリア利用の抵抗となる理由のうちとくにエリアサービスのあり方と関連する項目と符合するものであり、「手続きを簡略にしてほしい」「いろいろな活動に専有されているので、もっと解放してほしい」「屋内プールのように使える場所と時間帯について明示して公開してほしい」「用具貸し出しのサービスシステムがほしい」など、いずれも現在のサービスの改善を求めるものであった。

図18は、今後もっと自由に利用できるようにしてほしい施設を3つあげさせ、図11～15と同様に数量化してその要望をまとめたものである。屋内プールの利用希望がきわだって高く、ついで体芸テニスコート、トレーニング室、屋外プール、野球場、第1体育館、総合体育館のバスケットボール場、ライフル射撃場の順で利用希望が示された。

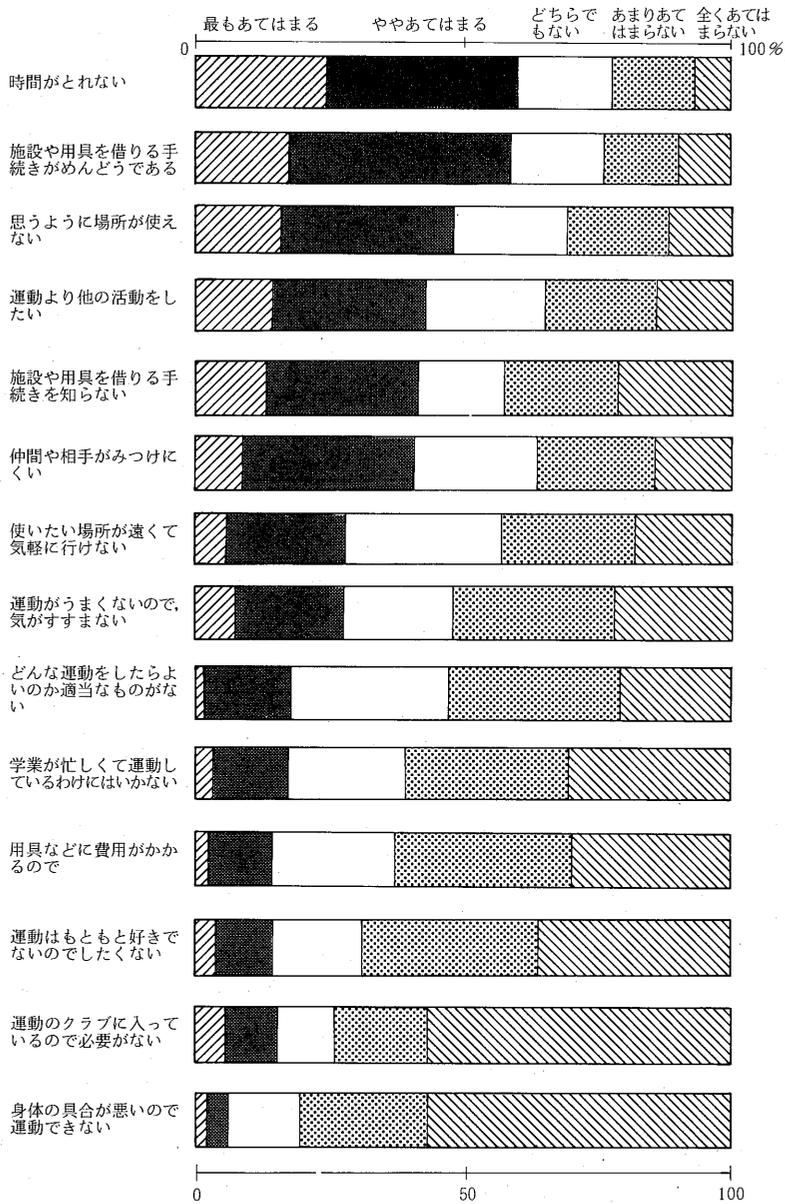


図16 エリア利用に対する抵抗条件

以上のように、図16から図18に示された運動者としての学生のエリア利用に関する抵抗条件や要望事項は、今後のエリアサービスのあり方にさまざまな課題を与えたものであった。

本学は他大学と比べて恵まれた運動施設を有しているものの、一般の学生が自由時に自由なやり方で施設を利用するための条件はま

だ十分整えられているとはいえないことを、今回の調査結果が指摘している。

運動施設によっては、専門的な競技施設として運動部や同好会の利用が中心となっており、Area利用階層のための一般的・主体的施設になり得ていないことが示された。また、専門的な競技施設ではあるが、屋内プールのようにすでに週3回の学内開放を実施してい

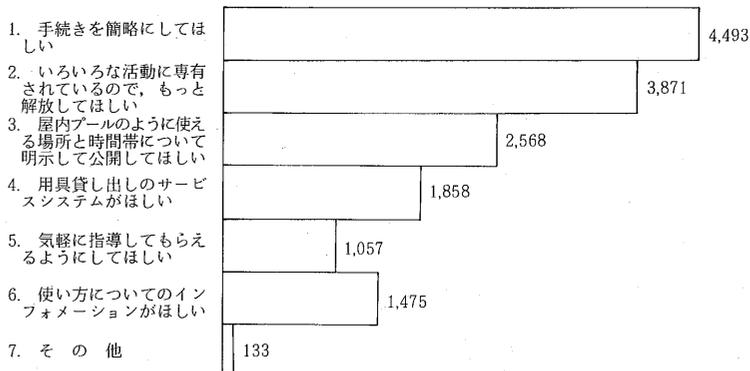


図17 エリア利用のために望んでいること

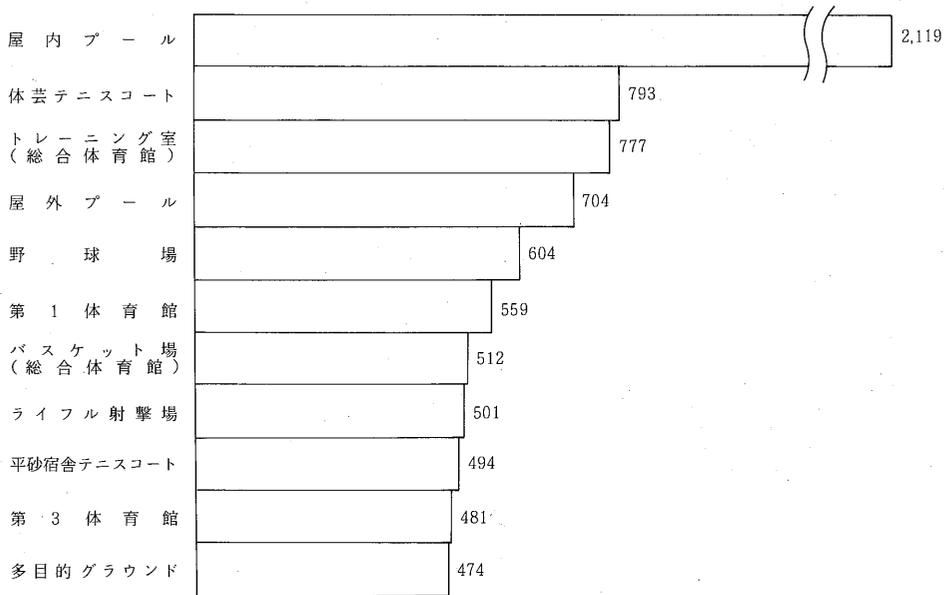


図18 自由に利用したい施設

る施設についても、学生はより以上の利用を要望しており、学内開放の曜日や時間帯をさらに広げる必要性が示唆されている。安全に対する監視員の問題、運動クラブの利用の調整など問題点が多いが、検討を急がねばならない具体的な課題であろう。その他の多くの施設についても屋内プールと同様に一般学生の自由時利用のためのシステムとそのためのインフォメーションを行うことによってArea利用階層の増加が期待できると思われる。

一方、Area利用階層の施設や用具の利用は、個人や少数の未組織な集団によるもので

あり、しかも土曜・日曜や授業の空き時間、放課後がその中心となっている。したがって、現状の施設使用規定による1週間前の申請と許可の手続や24時間以内に制限されている用具貸出の制度は、それほど計画的とはみられない自由時の自由な利用にとって、大きな抵抗条件となっていることが明らかにされた。

今回の調査結果は、今後のエリアサービスを検討するために有効な示唆をもたらしたといえよう。

## 5. 運動プログラム参加層の実態とプログラムサービスに対する学生の対応

筑波大学生の運動生活は、大部分が大学における体育事業との関わりで成立している。

彼等が生活の中で意図的に運動を行う形態の一つは、学内の運動プログラムに対応してスポーツをするタイプである。ここでは、スポーツデーで行われる各種の学内スポーツ試合や体育センター主催のスポーツ教室に参加して運動をする学生達の運動生活を明らかにするとともに、これら運動プログラムの提供に対する学生の対応をとらえ、今後のプログラムサービスの検討に役立てようとするものである。

### 1) 運動プログラム参加層の実態

過去1年間における学内の運動プログラムへの参加の有無を聞いたところ、参加したと答えた学生は全体の44%であり、参加しなかった者は56%であった。この44%を「運動プログラム参加層」と呼ぶことにすると、これらの中には、各種の運動クラブに所属している階層(Club所属階層)や自由時に運動施設を利用して自由なやり方で運動している階層(Area利用階層)も含まれている。そこで、

Club所属階層とArea利用階層を除いて、意図的に運動する機会が学内の運動プログラムへの参加に限定される「Program参加階層」(宇土<sup>5)</sup>の分類、B案による第3階層)だけを調べてみると、全体の11%であった。

運動プログラム参加層の実態をもう少し探ってみると、図19のようであった。

#### (1) 運動プログラム参加層の他の体育事業への対応

運動 Program 参加層の実態を性別、学年別、学群・学類別、にとらえると図19のようであり、全学生の72%を占める男子学生のプログラム参加率(75%)が女子学生(25%)より多く、また学年が進むにつれて Program 参加層が漸減する傾向であった。

医学専門学群と芸術専門学群の学生のプログラム参加は少なく、その他の専門学類の参加は、25~36%の範囲でとりわけ大きな偏りはみられないが、自然学類、生物学類、農林学類、社会工学類、基礎工学類など自然科学系の学生達のプログラム参加がやや積極的であるとみられる。

さらに、運動 Program 参加層と不参加層別に、他の体育事業への対応を調べてみると、

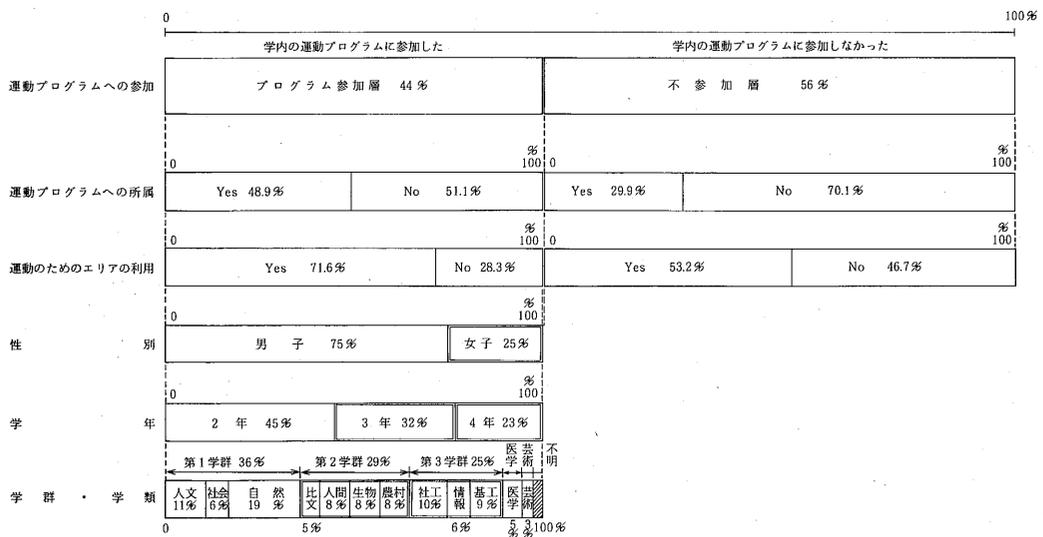


図19 運動プログラム参加層の実態

Program参加層の方が運動クラブへの所属(48.9%)や自由時のエリア利用(71.6%)の割合は高く、自発的に運動するという積極的な姿勢がうかがえる。しかしながら、何かの理由で運動プログラムに参加しなかった学生の29.9%は運動クラブに所属し、53.2%は自由にエリアを利用して運動していることも明らかにになった。

これらの結果は、学内の運動プログラムへ

の参加が相当数にのぼり、前回(昭和56年6月)の調査におけるProgram参加層とほぼ同様であった。これらの結果は、年々検討が加えられているスポーツデーなどのプログラムサービスが学生の生活の中にかなり定着し、有効に機能しつつあることも示唆している。

## 2) 学内の運動プログラムへの参加状況

Program参加層がどのようなプログラムにどれ位参加し、またどのような過程を経て

表7 学内の運動プログラム(体育事業として公式に開催されるもの)

### 1. スポーツデー

#### (1) スポーツデー(予選も含む正式種目)

A. 卓球	E. 水泳	I. 駅伝	M. 飛込み
B. バスケットボール	F. サッカー	J. バドミントン	N. 運動会
C. 剣道	G. バレーボール	K. ドッジボール	
D. ソフトボール	H. テニス	L. 水球	

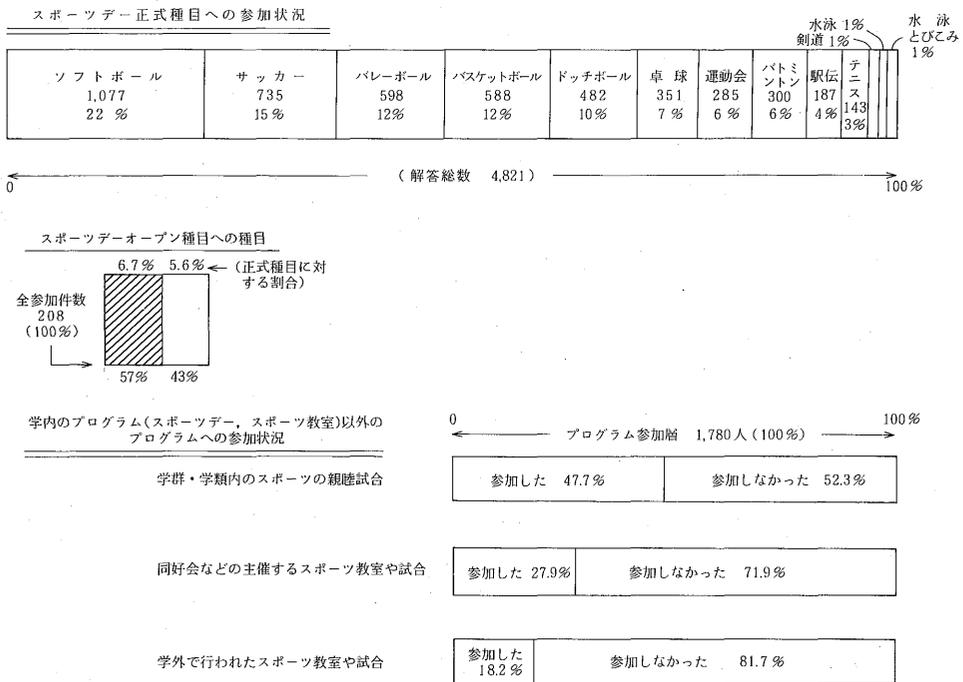
#### (2) スポーツデー(オープン種目)

A. ハンドボール	B. 軟式野球
-----------	---------

### 2. 公開されたスポーツ教室

A. 硬式テニス	D. 軟式野球	G. ヨット
B. 剣道	E. 飛込み	H. ゴルフ
C. 弓道	F. エアライフル射撃	I. バドミントン

図20 スポーツデーおよびスポーツデー以外のプログラムへの参加状況



参加したのかをとらえることにする。

(1) 運動プログラムの種類と参加状況

昭和57年度に体育センターの体育事業としてオフィシャルに開催された運動プログラムは、表7のようにスポーツデー(年2回)における正式種目(14)とオープン種目(2), および公開されたスポーツ教室(9)であった。

公開講座として開催されるスポーツ教室は、必ずしも本学学生だけを対象としていない上に、対象を学外者に限定したプログラムもあって、学生が受講し難い実施計画のものが多いので、参加学生数は9講座にわたってわずか34名であり、参加層全体の1.9%にすぎなかった。ここでは、主としてスポーツデーへの参加状況を考察の対象とする。

学類や学群単位でなされる予選への参加も含めて、スポーツデーの正式種目14競技への参加状況は、図20のとおりであった。

メンバー数の多いチームゲーム、とりわけほとんどの学生が過去に経験を有するとみられる競技種目への参加率が高い。このことは後述する参加の理由や動機の主なものに、“クラスやグループでの交友や親睦を深める”があげられており、そのための手段としてチームゲームへの参加が促されたことによるとみられる。

施設や場所の条件に恵れて成立する駅伝、テニス、水泳、水球、飛び込み、などの種目

は、特徴のあるプログラムであり、少数ながら年々参加者の増大がみられている。

オープン種目として開催された競技は、ハンドボールと軟式野球の2種目のみであったが、正式種目の卓球やバドミントンと同じくらいの参加状況であった。

運動Program参加層が、スポーツデーなどの公式のプログラム以外に参加している状況は、図20のようであった。

学群や学類の中で行われるスポーツの親睦試合への参加率は47.7%であり、学内レガッタやスキー教室などのような運動部や同好会が主催するプログラムへの参加者は29.9%であった。しかし、より積極的に学外のスポーツ教室や試合にも参加する者の割合は、18.2%にすぎなかった。

(2) 運動プログラムへの参加の過程

運動Program参加層が、どんな理由や動機に動かされ、どれくらい練習をし、参加後どのような効果を感じ得たのかを調べることによって、プログラム参加のプロセスをたどってみると図21のようであった。

プログラム参加の主な理由は、スポーツが好きであるから、交友関係を広げるため、気晴らしのため、などであった。

参加の動機としてあげられるのは、友達にさそわれたり、クラスやグループの代表に選ばれたり、など他からの働きかけに追従する

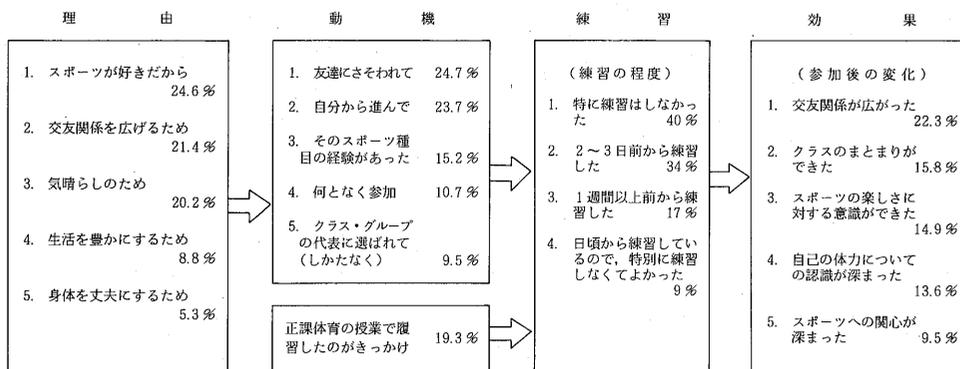


図21 運動プログラム(スポーツデー)参加の過程  
— プログラム参加の理由、動機、練習、効果 —

ものと、そのスポーツの経験があり、自ら進んで参加する、など内発的なものが認められた。

また、正課体育の授業での学習経験が動機づけとなって、そのスポーツのプログラムに参加した者は Program 参加層全体の 19.3% であり、それらの種目をあげると表 8 のようであった。このことは、正課体育がめざしているスポーツの生活化のあらわれとして注目しておかねばならないし、同時にプログラムサービスの意義や役割をも示唆しているであろう。

こうした理由や動機に動かされた Program 参加層の中には、試合を控えて特別に練習しなかった者が 40% もあったものの、一方では 2～3 日前から (34%) あるいは 1 週間以上前から (17%) 練習をした者が 51% を占め、さらに日頃から練習をしている者 9% を加えると、全体の 60% は試合当日の活動にとどまらず、プログラム参加をめざしてスポーツ活動を継続したことになる。参加したプログラムについては図 20 に示したとおりであった。ところで、プログラム参加後彼等はどのような変容、あるいは効果をとらえているのであろうか。図 21 の結果から次の二つの傾向が読みとれる。一つには、交友関係の広がりやクラスのままのようなスポーツによる人間関係の改善をあげ、もう一つは自己の変容とし

表 8 正課体育の授業がきっかけとなったプログラムへの参加状況

正課体育がきっかけとなった参加者数:343人  
全プログラム参加層 1,780人の(19.3%)

種目別の参加件数

順位	スポーツ種目	frequency	%
1.	サッカー	85	22.4
2.	バレーボール	78	20.5
3.	バスケットボール	62	16.3
4.	ハンドボール	58	15.3
5.	バドミントン	38	10.0
6.	テニス	22	5.9
7.	ソフトボール	12	3.2
8.	卓球	6	1.6
9.	陸上競技	4	1.1
9.	水泳	4	1.1
9.	剣道	4	1.1
12.	野球	3	0.8
13.	ラグビー	2	0.5
14.	オリエンテーリング	1	0.3
15.	弓道	1	0.3
参加件数合計		380	(100%)

表 9 今後のプログラム(スポーツデー)での希望種目

(これまで学内で実施されたもの以外についてのベスト10)

順位	スポーツ種目	frequency	%*
1.	ボーリング	1,064	(20.3)
2.	野球	649	(12.4)
3.	オリエンテーリング	529	(10.1)
4.	サイクリング	416	(7.9)
5.	軟式テニス	333	(6.3)
6.	frisbee	315	(6.0)
7.	ゴルフ	278	(5.3)
8.	ボート	236	(4.5)
9.	マラソン	227	(4.3)
10.	陸上競技	150	(2.8)

\*(% )は希望種目についての全解答数 5,250 を 100 % として算出した。

表 10 学内のプログラム(スポーツデー)に参加しない理由  
—運動プログラム参加への抵抗条件—

順位	理由	frequency	%*
1.	早朝から試合があり、めんどろだった	792	(15.2)
2.	他の活動と重なった	650	(12.5)
3.	運動プログラムについて、よく知らなかった	566	(10.9)
4.	参加の手続がめんどろだった	527	(10.1)
5.	運動がへただから	487	(9.4)
6.	参加してもつまらないと思った	483	(9.3)
7.	自分がやりたい運動種目がなかった	419	(8.1)
8.	いっしょに参加する適当な仲間がいなかった	411	(7.9)
9.	もともと運動がきらいだった	220	(4.2)
10.	参加したかったが、人数などの制限があって出られなかった	175	(3.4)

\*(% )は参加しない理由についての質問に対して、「もっともあてはまる」および「ややあてはまる」と解答した総数 5,195 を 100 として算出した。

て、スポーツの楽しさに対する意識や関心の増大、体力についての認識の深まりをあげて、それぞれ評価している。

以上のような結果に基づいて、学内の運動プログラムへの参加の過程を考察すると、二つのパターンがとらえられる。

すなわち、一つの流れは友達にさそわれ、グループやクラスの代表に選ばれたことがきっかけとなり、交友関係を広げることを目的に、主としてチームゲームに参加し、その結果クラスのまとまりができたことや交友関係の深まりを評価しているもので、集団参加型とみられるパターンである。これに対してもう一つのプロセスは、自らスポーツが好きで経験があり、生活を豊かにしたり身体を鍛えようと自ら進んで出場し、個人競技や対人競技(卓球、バドミントン、テニスなども含む)などで頑張り、その成果として自己の体力を認識したりスポーツの楽しさを自ら体験したことに満足しているもので、個人参加型とみなされるパターンである。むろん、すべてをこれらのパターンにあてはめることはできないまでも、典型的な二つの参加プロセスとして捉えることはできよう。

これらの参加プロセスはまた、現在のスポーツデーが持つ意義や役割を示唆している。

### (3) 今後のスポーツデーで希望する種目

Program 参加層に限らず、すべての学生を対象に今後スポーツデーで希望する種目を調べた結果は表9のようであった。

全体の10%以上の学生が希望しているベスト3はボーリング(1,064人、20.3%)、野球(649人、12.4%)、オリエンテーリング(529人、10.1%)であり、いずれも正課体育で開講されている種目であった。

ボーリング、サイクリング、ゴルフ、ボート、などのように学外にその施設を求めねばならないものもあるが、プログラム立案の工夫によってはこれらの種目の実施も不可能ではない。軟式テニス、フリスビー、マラソン、

陸上競技、野球、などの種目の実施は十分可能であろう。

こうした希望種目の実現が新たな参加層を産み出す期待があるだけに、今後のプログラムサービスにおいて十分検討が求められる。

### 3) 運動プログラム参加の抵抗条件

運動Program不参加層を対象に参加しなかった理由を調べた結果は表10のようであった。運動プログラムに対して運動者がどのような行動傾向をとるかは、プログラムサービスの考え方や運営の方法を検討する上で重要な問題といえる。そのための手がかりとして運動の機会から逃避し、プログラム参加を阻んだ理由(抵抗条件)を取りあげた。

運動がへただから(9.4%)、参加してもつまらない(9.3%)、運動がきらいだ(4.2%)、など主体的条件が抵抗になっている場合が認められたが、その他の理由は、スポーツデーの開催方法(期日、試合方法、参加方法、種目の選定、公報、など)の検討によって解消可能なものが多かった。

表9にみられた希望種目を取り入れてプログラムの多様化を図ったり、現行の春・秋の定期的開催以外にもプログラムを提供したり、正課体育の受講クラスを単位とするチームの参加を促し、学習成果の発表の機会とすると同時に参加するための仲間の条件を整えたりすることなど、今後のプログラムサービスに対するさまざまな示唆が得られたといえよう。

## 6. Stay 階層の運動生活

ここでは、体育系の課外活動団体に所属せず、体育的なプログラムにも参加せず、また自由時間に自由なやり方で運動を楽しむこともせず、正課体育の授業以外には意図的な運動はほとんど行っていない学生、いわゆるStay階層について考慮するものである。運動生活の階層的なとらえ方からいえば、Stay階層は運動することから逃避しているもっとも消極的な学生達とみられる。

今回の調査によると、Stay 階層は全体の29%を占めており、男子では26%であったが、女子では36%にも達していた。このことは男子では4人に1人の学生が、女子では3人に1人が、義務づけられている正課体育の授業で運動する以外には意図的に運動しないことを意味しており、予想以上に多いことが注目される。この結果は前回(昭和56年6月)の調査結果<sup>4)</sup>(Stay 階層：全体で21%、男子18%、女子29%)を上まわるものであった。このような現状においてStay 階層を減少させることは、これからの体育事業が解決しなければならない大きな課題であり、そのためにもStay 階層の実態を十分把握しておくことが必要である。ここでは、Stay 階層以外の学生との比較を中心としてStay 階層の実態をとらえることにする。

### 1) Stay 階層の体力・運動能力に対する自己評価

図22は、健康や体力・運動能力についての

自己評価を示したものである。Stay 階層で、自分があまり健康でないと考えている者は12%だけであるが、あまり体力・運動能力はないと考えている者は49%とほぼ半数を占めており、体力・運動能力の不足を自覚している者の多いことを示している。また、体力・運動能力の不足を自覚していながらも、健康や体力にあまり注意を払っていないという者が36%もあり、どの点においてもStay 階層以外の者に比べて劣っているということがわかる。

図23は、過去のスポーツに対する姿勢について、幼児から小学校、中学校、高校と分けて調査したものである。小、中、高校時代を通じて、Stay 階層の者でスポーツに対して積極的だったのは、Stay 階層以外の者の約半数にすぎない。特に高校時代においてはスポーツに対して積極的だった者が17%と極端に減少し、消極的だったと答えた者が63%にも達しているが、これは大学受験が大きく影響してスポーツから遠ざかったものと思われる。

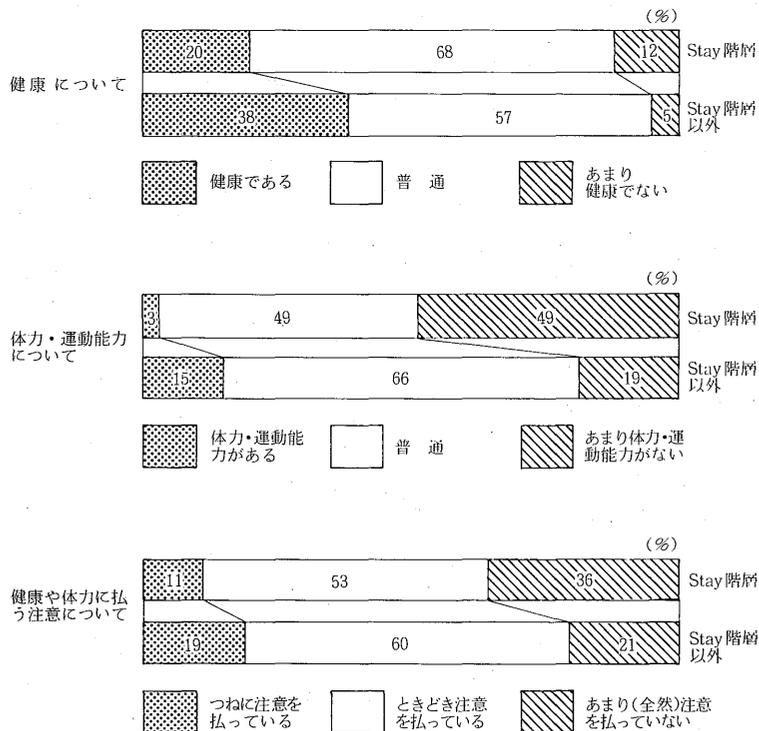


図22 健康や体力・運動能力についての自己評価

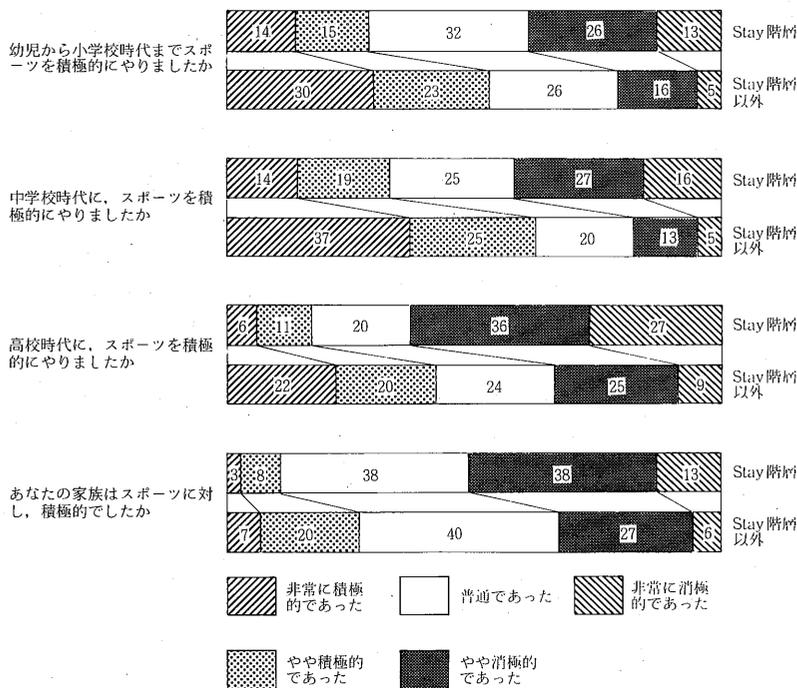


図23 過去のスポーツに対する姿勢

また、Stay階層の者の家族は、Stay階層以外の家族よりもスポーツに対する積極性がなく、本人のスポーツに対する姿勢にある程度、影響を及ぼしているものと考えられる。

## 2) 運動・スポーツに対する抵抗条件

体育系課外活動団体に所属することに対する抵抗条件としてあげられる各項目についてまとめたのが図24である。“運動よりほかに好きな活動がある”、“練習で疲れる”、“特別に思いあたらないが何となく”等の理由が多く、Stay階層以外の者との比較では、“もともと運動が好きでない”、“身体が弱く体力がない”、“仲間づきあいがわずらわしい”という理由において違いがみられ、Stay階層の運動に対する消極的な姿勢がみうけられる。しかし、“運動部や同好会の活動はあまり価値がないように思う”においてあてはまると答えている者は6%と少ないので、本人は運動に対して消極的であるが、体育系課外活動団体の価値や意義は認めているということだろう。指導者、施設・用具、家庭状況等の外的

要因による理由ではあてはまると答えている者が少ないので、体育系課外活動団体に所属しないのは、本人の運動に対する意欲、積極性のなさが原因となっていると考えられる。

図25は、学内の運動プログラムに参加することに対する抵抗条件としてあげられる各項目についてまとめたものである。Stay階層の理由としては、“早朝から試合がありめんどうだった”、“運動がへた”があげられる。また、“運動がへた”、“もともと運動がきらいだった”という理由で、Stay階層以外の者と大きな違いがみられ、ここでもStay階層の運動に対する意欲のなさがうかがえる。

図26は、自由時間に自由なやり方で運動を楽しむことに対する抵抗条件としての各項目についてまとめたものである。“運動より他の活動がしたい”、“施設や用具を借りる手続きがめんどうである”、“時間がとれない”、“施設や用具を借りる手続きを知らない”、“運動がうまくないので気がすまない”等の理由が多いようである。“運動より他の活動が

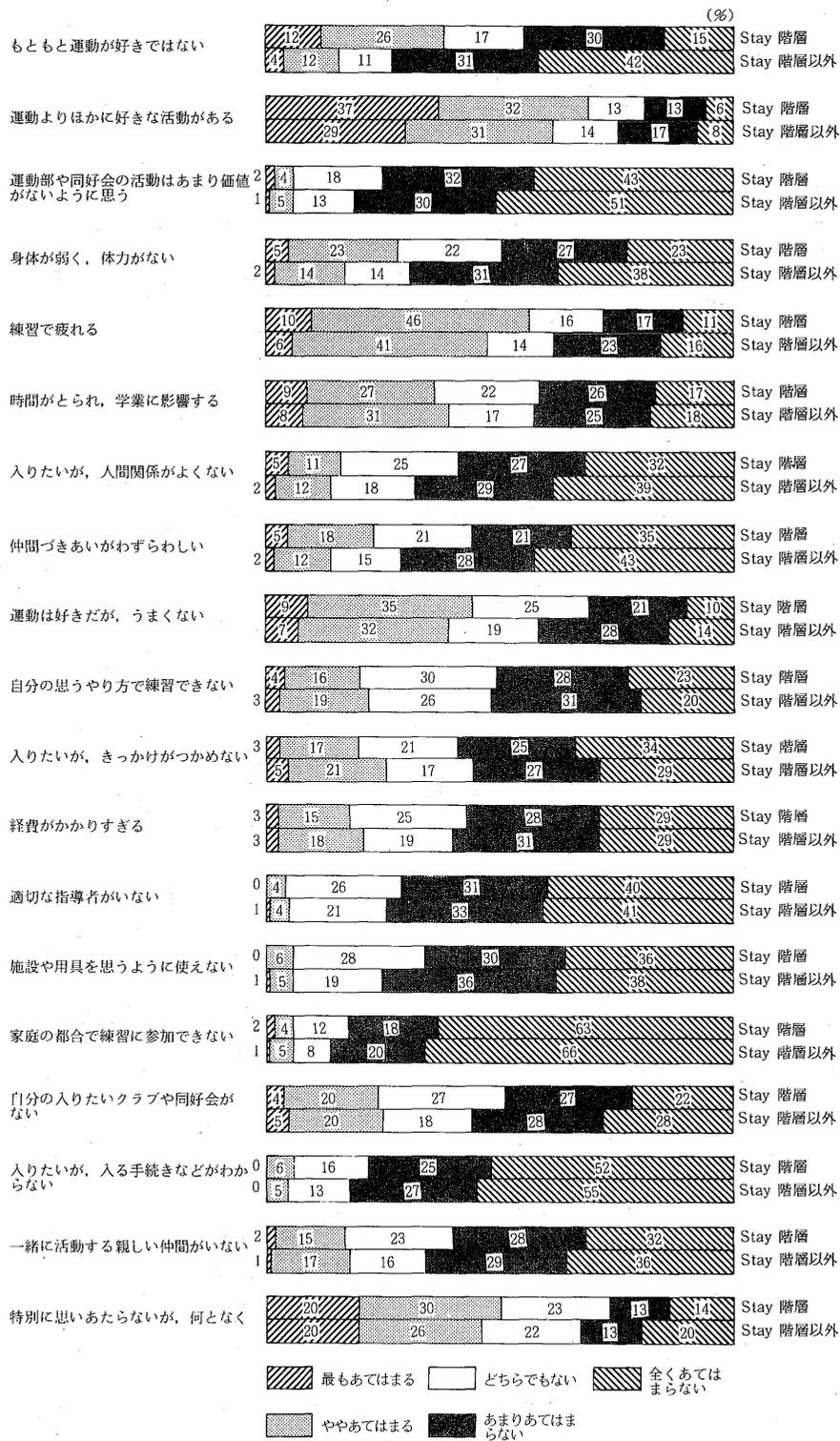


図 24 体育系課外活動団体に所属することに対する抵抗条件

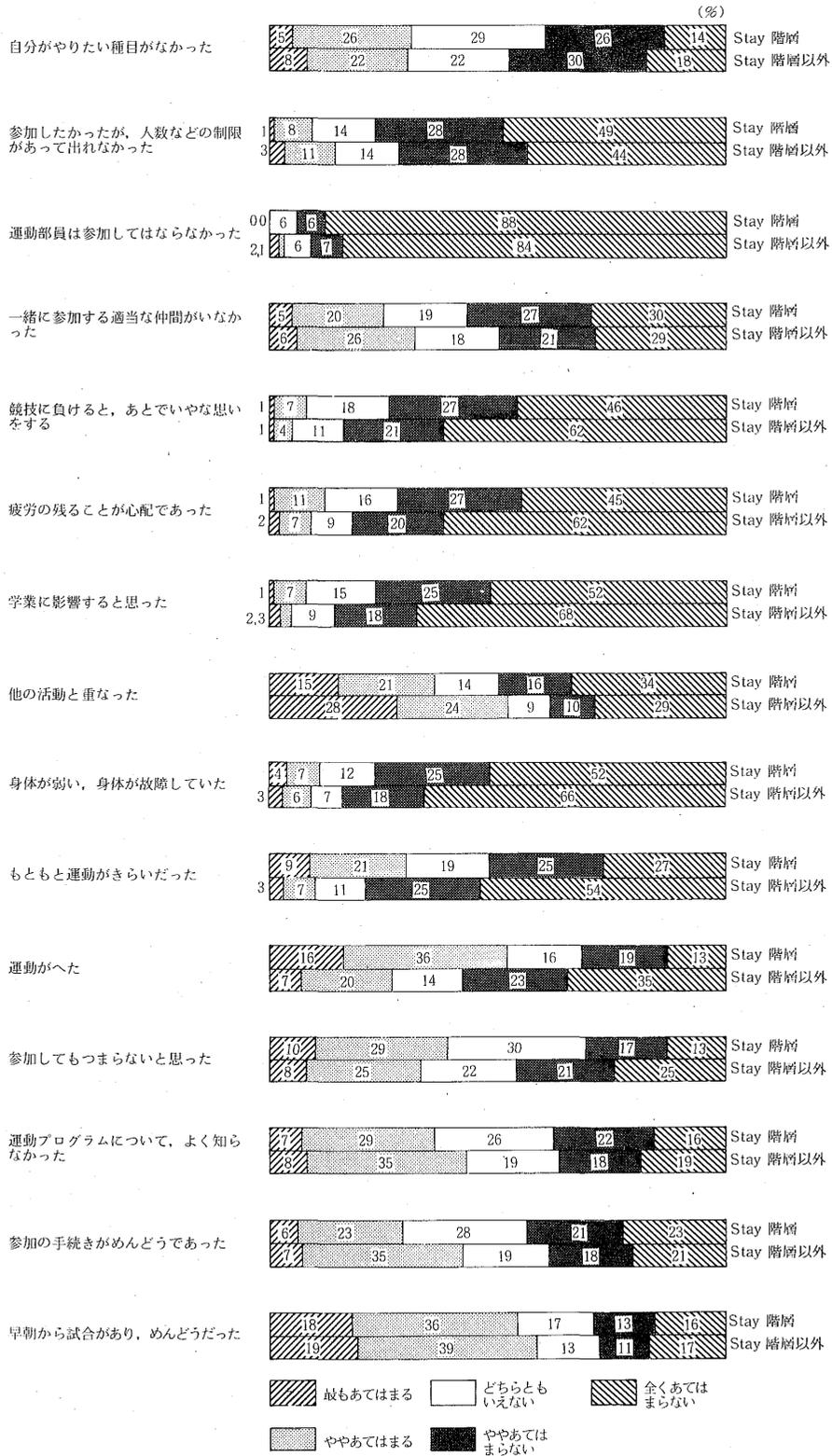


図25 学内の運動プログラムに参加することに対する抵抗条件

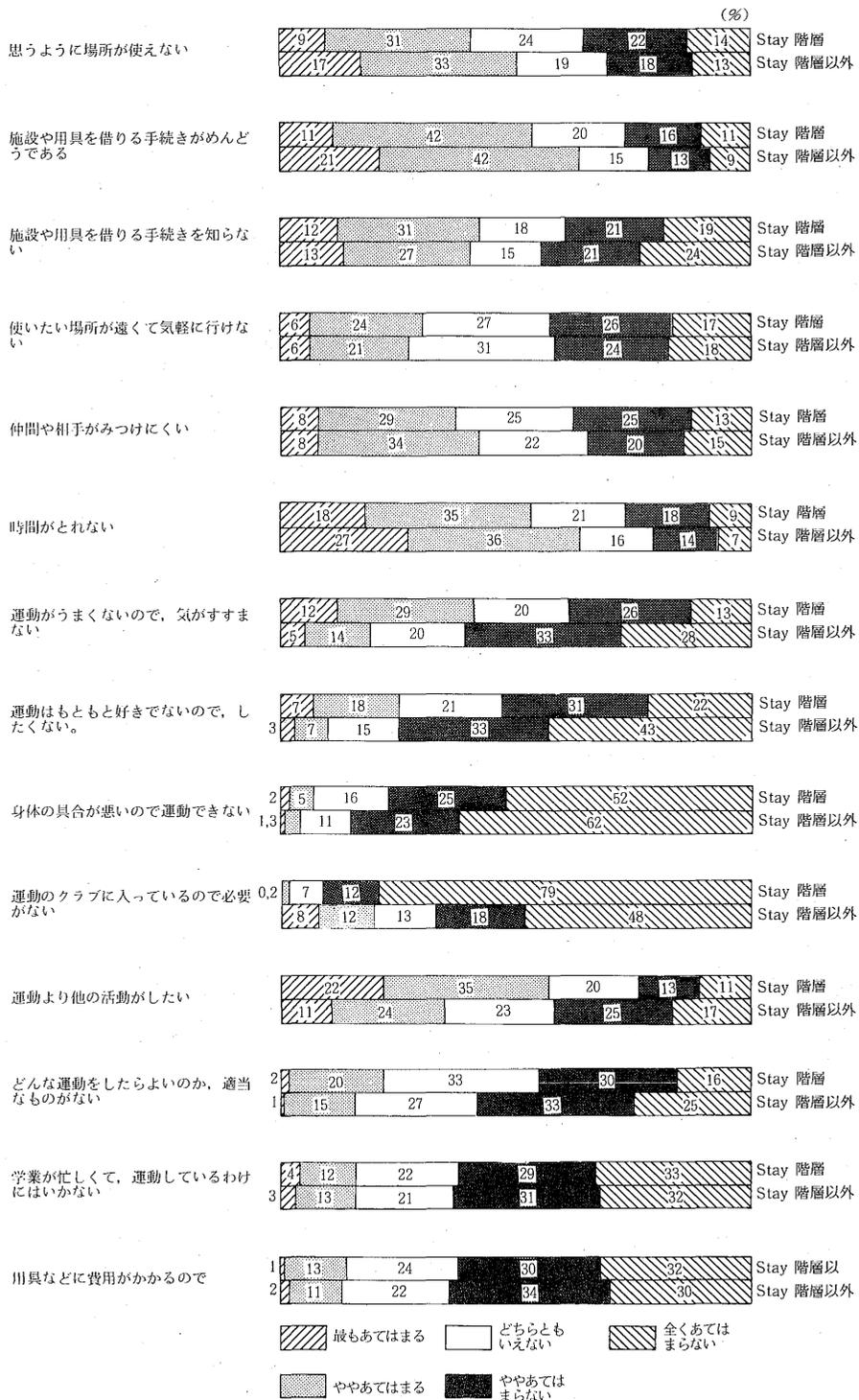


図 26 自由時間に自由なやり方で運動を楽しむことに対する抵抗条件

したい”、“運動がうまくないので気がすすまない”の理由において、Stay 階層以外の者との違いが目立つ。

これらの運動に対する抵抗条件で共通なものは、“運動より他の活動がしたい”、“運動がうまくないので気がすすまない”であり、Stay 階層の運動に対して消極的な様子がはっきりとあらわれている。しかし、図24では、“運動は好きだがうまくない”という理由で体育系課外活動団体に所属しないと答えている者が44%にも達している反面、“運動部や同好会の活動はあまり価値がないように思う”と答えている者は6%しかないことをみれば、運動を根本から否定しているものではないと思われる。運動はそれほど嫌いではなかったのだが、大学受験や身体的条件などの影響で運動から遠ざかることになり、運動以外の活動に積極的になっていたともみられる。体育系課外活動団体に所属することに対する抵抗条件では施設・用具等の外的要因によるものは少なかったのだが、自由時間に自由なやり方で運動を楽しむことに対する抵抗条件では、施設・用具や手続き等の外的要因による理由も目立ってきている。この外的要因が大きな比率を占めるということは、前回（昭和56年度）の調査でも同様な結果を得ているもので、これらの点を改善すれば体力・運動能力の不足を自覚している者の多いStay 階層だけに、運動に対する積極性を増し、Area 利用階層への変容が可能かもしれない。

表11は、今後、もっと自由に利用できるよ

うにして欲しい施設について示したものである。Stay 階層、Stay 階層以外のどちらもほぼ同じような施設を希望しており、プールとテニスコートの希望が多いが、最近のテニス・水泳のブームとともに身近にある施設を利用しようとしているものと思われる。また、トレーニング室を希望しているのは、体力不足を自覚して自らトレーニングしようとする意識のあらわれともみられる。

### 3) 正課体育に対する対応

表12は、正課体育の定時コースにおいて、これまでに履修した種目の状況について示したものである。種目によって開講時数や受講人員に違いがあるので、ただ単に人数だけで種目に対する興味、関心の度合をみるわけにはいかないが、この表からStay 階層の者は体力不足を意識してか、体操トレーニングや陸上運動など、体力向上をねらいとするような種目を多く履修してきているようである。また、個人種目の履修が多いことも特徴といえ

表11 今後、もっと自由に利用できるようにしてほしい施設

施設	(%)	
	Stay階層	Stay階層以外
屋内プール	17	15
テニスコート	17	17
第1第2トレーニング室	7	5
屋外プール	6	5
ライフル射撃場	5	4
学内・近隣の道路や広場	5	2
多目的グラウンド	4	4
キャンプ場	3	2
第三体育館	3	4
バスケット場	3	4
ゴルフコース	3	2
第1体育館	3	4

表12 これまでに履修した種目の状況 (%)

種目	Stay階層		種目	Stay階層	
	Stay階層	Stay階層以外		Stay階層	Stay階層以外
体操トレーニング	14	8	バスケットボール	4	8
陸上運動	7	7	サッカー	4	8
剣道	7	5	卓球	4	2
柔道	6	5	器械運動	4	3
バドミントン	6	6	オリエンテーリング	4	2
バレーボール	5	9	基本運動	3	3
硬式テニス	5	7	ライフル射撃	3	1
水泳	5	5	ラグビー	3	5
サイクリング	4	2	ゴルフ	3	2
ハンドボール	4	9	弓道	1	1

表13 正課体育履修による影響

(人)

	Clubに所属		Programに参加		自由に運動	
	Stay階層	Stay階層以外	Stay階層	Stay階層以外	Stay階層	Stay階層以外
体操トレーニング	0	0	0	0	1	41
陸上運動	0	0	0	5	0	13
基本運動	0	0	0	0	2	2
器械運動	0	0	0	0	0	2
水 泳	0	0	0	5	9	95
オリエンテーリング	1	2	0	1	1	3
サイクリング	0	0	0	0	2	4
ゴルフ	0	0	0	0	1	10
ライフル射撃	0	0	0	0	0	0
弓 道	0	0	0	1	0	0
柔 道	1	2	1	0	1	0
剣 道	0	4	0	6	0	3
空 手	0	1	0	0	0	0
サッカー	0	13	1	97	1	25
ラグビー	1	4	0	3	0	3
バスケットボール	0	6	2	73	0	19
バレーボール	1	9	6	86	0	23
ハンドボール	0	7	1	65	0	3
野 球	0	0	0	3	0	9
ソフトボール	0	0	0	13	0	8
硬式テニス	0	13	0	23	8	163
バドミントン	0	14	2	51	7	35
卓 球	0	0	0	12	3	38
トリム運動	0	0	0	0	0	0
ヨット	0	0	0	0	0	0
ボート	0	0	0	0	0	0
ウインドサーフィン	0	0	0	0	0	3
計	4	75	13	444	36	502

表14 開設科目の履修希望状況

(名)

種 目	Stay階層以外		種 目	Stay階層以外	
	Stay階層	Stay階層以外		Stay階層	Stay階層以外
硬式テニス	14	18	基本運動	3	2
ライフル射撃	12	8	弓 道	3	2
バドミントン	8	6	オリエンテーリング	2	1
サイクリング	8	5	剣 道	2	1
卓 球	7	4	野 球	2	5
バレーボール	6	9	ソフトボール	2	4
体操トレーニング	5	2	サッカー	2	6
水 泳	5	5	陸上運動	2	1
ゴルフ	4	5	柔 道	2	1
バスケットボール	4	5	ラグビー	2	3

る。それに対し、Stay階層以外の者はバレーボール、ハンドボール、バスケットボール、サッカー等、球技系の種目を多く履修してきている。これは、Stay階層の者が集団で行うスポーツに対してわずらわしさを感じており、スポーツそのものの楽しさを感じることができないと同時にスポーツ技能の不足を自覚していることなどがうかがえる。

表13は、正課体育履修による影響について示したものである。Stay階層の者はStay階

層以外の者に比べ、正課体育で履修したことがきっかけとなってその後、“運動部や同好会に所属して運動するようになった”、“スポーツデーやスポーツ教室に参加して運動するようになった”、“自由時間に施設や用具を利用して自由に運動するようになった”のいずれにおいても非常に人数が少なかった。このことは正課体育の履修が、Stay階層の運動生活を大きく変容させるまでに到っていないことを示している。

表15 履修希望の理由

項 目	(%)	
	Stay階層	Stay階層以外
やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので	15	12
運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので	15	9
この種目なら人並にできると思ったので	13	9
体力や運動能力を高めたいと思ったので	8	7
体力や技能が劣るが、この種目ならできそうだったので	8	3
その種目の技術をいっそう高めたいので	6	13
その種目について、もっと深く知りたいので	6	9
施設の条件が恵まれているので	6	2
中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから	4	8
筑波大学でしか履修できないと思ったので	4	4
中学・高校の体育の授業で経験した種目なので	4	6
自然とのふれあいを求めて	3	7
友人や仲間との交流を求めて	2	5
友人や仲間におすすめされたので	2	2
スポーツのマナーや態度を養いたいので	1	2
自分の身体条件(ケガや障害など)に適した種目なので	1	1
指導教官にひかれて	1	2
苦手な種目だがあえて挑戦しようと思ったので	1	1

表14は、ガイダンスにおいて履修したいと思った開設科目について示したものである。最も希望の多い科目はStay階層、Stay階層以外のどちらにおいても硬式テニスである。これまでに履修した種目では体操トレーニング等、体力向上をねらいとするような種目の履修が多かったが、ここではライフル射撃のように概して運動量の多くない種目やバドミントン等のようにスポーツの中では手軽に行えるような種目の履修を希望しており、履修希望現況からは、体力不足を自覚し、積極的に運動していこうという姿勢はあまりみられない。これも、前回の調査とほぼ同様な結果となっている。

表15は、第一希望の開設科目を希望する理由について示したものである。Stay階層の者は、“やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので”、“運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので”といった理由が多いが、“この種目なら人並にできると思ったので”、“体力や技能が劣るが、この種目ならできそうだったので”というような運動に対する消極的な姿勢からでてくる理由も多く、前回の調査においても、それぞれ16%、7%と高い割合を示している。これらのことからStay階層の中には、運動に対する消極性から

正課体育に対しても多くを期待していない者もいるということが考えられる。Stay階層以外の者では、新しい体験、健康増進の理由の他に、“その種目の技術をいっそう高めたいので”、“その種目について、もっと深く知りたいので”というように、授業や運動に対して積極的な姿勢がうかがえるし、“自然とのふれあいを求めて”といった理由も多い。

図27は、現在の正課体育の定時コースに対する満足度について示したものである。“定時コースと集中コースを開設する制度”と“定時コースで用いる施設・用具の条件”において満足度が高く、“四年間、正課体育を履修する制度”、“定時コースの種目選択・抽選方式”、“定時コースの開設時間割”において不満の多いのが目立つ。特にStay階層以外の者に比べ、“四年間、正課体育を履修する制度”における不満が多い。これまでの結果から、Stay階層の者は運動に対して消極的で、また、それに関連して正課体育に対しても多くのことを期待していないとみられるが、それらのことを考慮すると、Stay階層が、“四年間、正課体育を履修する制度”に不満をもつ者が多いのは当然のこととも考えられる。“定時コースの開設時間割”ではStay階層以外の者も同様に不満が多いが、これらは希望する種目

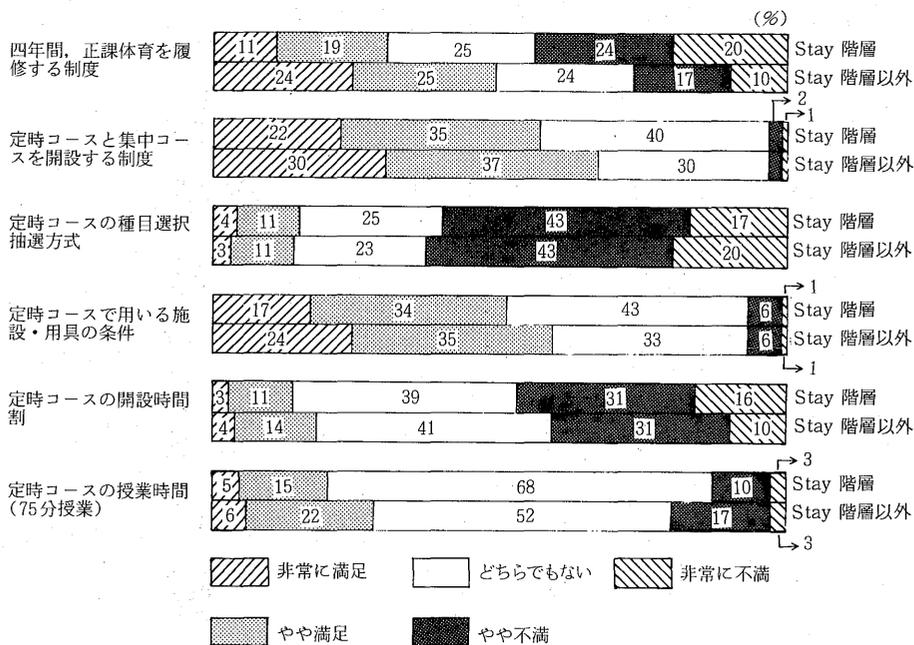


図27 現行の正課体育に対する満足度

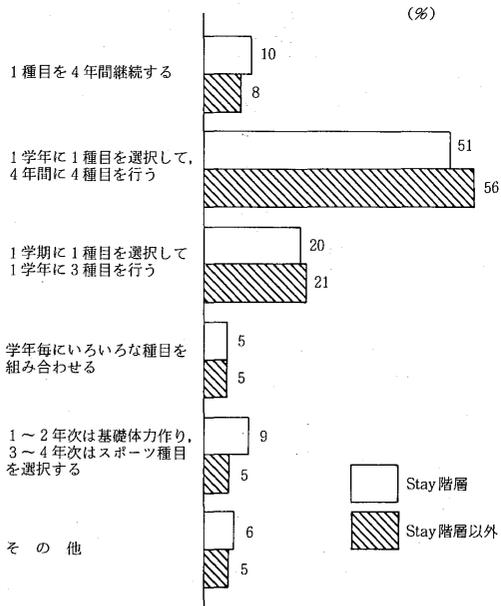


図28 正課体育の受講のしかたに対する意識

を選べない等の理由から学生全体に不満とする者が多いものと考えられる。“定時コースの授業時間”においてはStay階層の68%もの学生が満足、不満のどちらでもないと答えているが、これも正課体育にあまり関心をもつ

ていないことのあらわれとみられる。

図28は、正課体育の受講のしかたについての意識を示したものである。前出の正課体育定時コースに対する満足度では、“四年間、正課体育を履修する制度”に対して不満を示しながらも、ここでは一応、“学年毎に好きな種目を一種目選択し、四年間で四種目くらい受講する”という現在の方法を希望する者が多く、Stay階層以外の者との差はほとんどみられない。

図29は、前年度受講した授業における満足度について示したものである。“学習・指導のすすめ方”において最も満足度が高く、特に不満の目立つものは少ない。“運動技能の伸び方”についてはStay階層、Stay階層以外のどちらにおいても不満が多く、満足という者も少ない。このことは、学生は正課体育に対して新しい体験をすることや健康増進を期待しながら、さらに、運動技能を高めるということも望んでいることを示唆している。したがって、運動に対して消極的で、正課体育にさえも意欲を示さないStay階層に対しては、

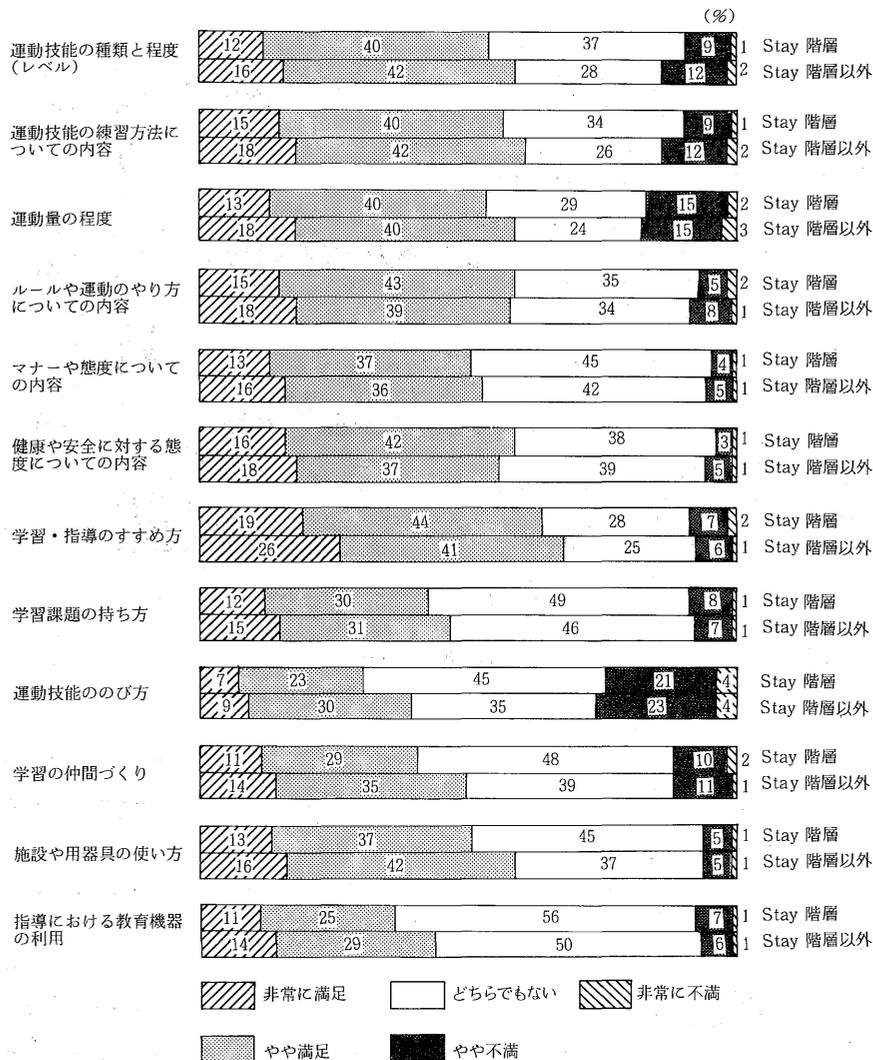


図 29 前年度受講した授業における満足度

彼等の技能水準に応じた指導段階を考慮することによって、“運動技能の伸び”を動機づけとして彼等の運動に対する積極性を少しでも引き出すことができるのかもしれない。

## 7. 筑波大生の正課体育履修の実態とその対応

正課体育は体育事業の分類からみれば、プログラムサービスの代表的・典型的なものであり、学習者としての運動者の特性に応じながら運動の学習指導がもっとも恵まれた条件

で組織的に展開されるプログラムである。

スポーツの生活化を指向して四年間の履修を制度化している本学においては、正課体育における学習の成果が運動を身につけるだけでなく、身につけた運動が他の体育事業との関連(クラブ所属、プログラム参加、エリア利用など)で日常的に実践されるように発展させたいと考えている。事実、教科としての「体育」は、学習内容や学習指導に関する配慮を深めるほど、このような発展の可能性を持っているといえよう。

表16 正課体育履修による影響

	Clubに所属		Programに参加		自由に運動	
	f	%	f	%	f	%
体操トレーニング	0	0	0	0	40	8
陸上運動	2	2	5	1	13	3
基本運動	0	0	0	0	4	1
器械運動	0	0	0	0	2	0
水泳	5	6	5	1	100	20
オリエンテーリング	3	3	1	0	3	1
サイクリング	0	0	0	0	6	1
ゴルフ	0	0	0	0	10	2
ライフル射撃	0	0	0	0	0	0
弓道	0	0	1	0	0	0
柔道	3	3	1	0	1	0
剣道	4	5	6	1	2	0
空手	1	1	0	0	0	0
サッカー	13	15	98	21	24	5
ラグビー	5	6	3	1	2	0
バスケットボール	6	7	75	16	19	4
バレーボール	10	12	92	20	20	4
ハンドボール	7	8	66	14	2	0
野球	0	0	3	1	7	1
ソフトボール	0	0	13	3	7	1
硬式テニス	13	15	23	5	159	33
バドミントン	14	16	53	12	36	7
卓球	0	0	12	3	31	6
トリム運動	0	0	0	0	0	0
ヨット	0	0	0	0	0	0
ボート	0	0	0	0	0	0
ウィンドサーフィン	0	0	0	0	1	0
計	86	100	457	100	489	100

このような観点から、ここでは本学学生の正課体育履修の実態とその対応について、彼等の運動生活の階層との関連から考察するものである。

### 1) 正課体育履修による影響

表16は、正課体育履修による影響を他の体育事業との関連でとらえたものである。“受講したことがきっかけとなって、その後、体育系課外活動団体に所属するようになった種目”では、バドミントン、サッカー、硬式テニス、バレーボールと球技種目で何人かみられるが、延べ人数でわずか86名と少なく、全サンプルの2.7%にすぎなかった。現状では、正課体育での学習が多くを学生を体育系課外活動団体に所属させるほどの影響は及ぼしていないとみられる。“受講したことがきっかけとなって、その後、スポーツデーやスポーツ教室に参加して運動するようになった種目”は、サッカー、バレーボール、バスケットボール、ハンドボールなどの球技種目に集中している。

これは、スポーツデーで行われる種目との関連で、このような結果になったものと思われる。“受講がきっかけとなって、その後、自由時間に自由に運動するようになった種目”では硬式テニスが非常に多い。これは現在のテニスブームに加え、学内のいたる所にテニスコートがあり、自由に利用できるという恵まれたエリアの条件と関連していると思われる。水泳や体操トレーニングも同様に恵まれた施設が開放されているため、学生が運動不足を解消し、健康の増進をはかろうと自由時間に利用しているとみられる。以上のように、正課体育を受講したことがきっかけとなって、体育系課外活動団体に所属した学生はあまりみられなかったが、スポーツデー等に参加するようになった学生や自由時間に自由に運動するようになった学生は450～480名で、全サンプルの約15%であった。このことは、恵まれた環境条件と正課体育での運動の学習が、プログラムサービスやエリアサービスに対応

表17 これまでに履修した種目

種目	f	%	種目	f	%
体操トレーニング	549	9	柔道	308	5
バレーボール	508	8	ラグビー	292	5
ハンドボール	484	8	器械運動	216	3
バスケットボール	474	8	基本運動	164	3
サッカー	452	7	卓球	154	2
硬式テニス	429	7	オリエンテーリング	148	2
陸上運動	422	7	サイクリング	127	2
バドミントン	364	6	ゴルフ	117	2
水泳	337	5	野球	108	2
剣道	330	5	ソフトボール	93	1

表18 開設科目の履修希望現況

科目	f	%	科目	f	%
硬式テニス	490	16.5	弓道	70	2.4
ライフル射撃	274	9.2	ラグビー	68	2.3
バレーボール	233	7.8	基本運動	62	2.1
バドミントン	182	6.2	ウィンドサーフィン	62	2.1
サイクリング	158	5.3	剣道	44	1.5
卓球	157	5.3	オリエンテーリング	41	1.4
バスケットボール	144	4.8	陸上運動	35	1.2
サッカー	141	4.7	柔道	35	1.2
水泳	140	4.7	ヨット	32	1.1
ゴルフ	130	4.4	器械運動	31	1.0
野球	121	4.4	トリム運動	13	0.4
ハンドボール	110	3.7	空手	11	0.4
ソフトボール	98	3.3	ボート	9	0.3
体操トレーニング	82	2.8			

する運動行動を引き出し発展させる機能を有していることを示している。

## 2) 履修希望の科目とその理由

表17は、これまでに履修した種目について示したものである。体操トレーニングが最も多く、以下、バレーボール、ハンドボール、バスケットボールと球技系の種目の多いことが目立つ。これは、種目の特性よりも開講している時間数や受講人員との関連が大きいように思われる。

表18は、ガイダンスにおいて履修したいと思った開設科目について示したものである。ここでも硬式テニスの希望者の多いことが目立つ。正課体育の授業としては珍しいライフル射撃の希望者も多い。また、バレーボール、バドミントン、サイクリング、卓球など、ふだんの生活で気軽に親しんでいる種目の希望も目立っている。

表19は、第一希望の開設科目を希望する理由について示したものであるが、“やったことがないが新しい体験をしようと思ったので”、

表19 履修希望の理由

希望する理由	f	%
やったことがないが新しい体験をしようと思ったので	771	25.9
中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから	554	18.6
その種目の技術をいっそう高めたいので	349	11.7
この種目なら人並にできると思ったので	290	9.8
中学・高校の体育の授業で経験した種目なので	259	8.7
体力や運動能力を高めたいと思ったので	179	6.0
運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので	168	5.6
その種目について、もっと深く知りたいので	107	3.6
体力や技能が劣るが、この種目ならできそうだったので	56	1.9
筑波大学でしか履修できないと思ったので	42	1.4
施設の条件が恵まれているので	38	1.3
友人や仲間との交流を求めて	30	1.0
自然とのふれあいを求めて	29	1.0
友人や仲間におすすめされたので	25	0.8
苦手な種目だが、あえて挑戦しようと思ったので	25	0.8
指導教官にひかれて	24	0.8
自分の身体条件(ケガや障害など)に適した種目なので	15	0.6
スポーツのマナーや態度を養いたいので	11	0.4

“中学、高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから”、“その種目の技術をいっそう高めたいので”などの理由が多い。また表20は、それぞれの理由に該当する開設科目を示したものである。希望する理由で最も多かった“やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので”という理由では、ウォーターフロントスポーツ、ライフル射撃、ゴルフなど、他大学の正課体育ではあまり行われていないと思われる種目と、弓道、剣道などの種目が目立っている。硬式テニスはそれらとは別に現在のテニスブームとの関連でやってみたいという意識からの希望と思われる。中学、高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから”ではバスケットボール、サッカー、野球等、球技系の種目が多い。“その種目の技術を高めたいので”では野球と硬式テニスが多い。野球の場合は中学、高校までに経験した学生が技術をいっそう高めたいと希望したものとされる。硬式テニスの場合は、これまでに経験した者よりは、むしろ、学内のテニスコートを利用して何度かテニスを経験した学生が、その技術をさらに高めようとしているということが考えられる。この種目なら人並にできると思ったので”ではサイクリング、ソフトボール、バドミントンなど、ふだん気軽に行っており、運動量もあまり多くないと思

表20 履修希望の理由に該当する科目

希望する理由	該当する科目
やったことがないが新しい体験をしようと思ったので	ヨット(81.3)、ライフル射撃(75.5)、ウィンドサーフィン(69.4)、ゴルフ(66.2)、弓道(62.9)、剣道(34.1)、ボート(33.3)、硬式テニス(31.4)、オリエンテーリング(29.3)、ラグビー(26.5)、サイクリング(24.1)、バドミントン(15.4)
中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから	バスケットボール(49.3)、サッカー(44.0)、野球(37.2)、卓球(36.3)、器械運動(35.5)、バレーボール(30.0)、剣道(29.5)、柔道(25.7)、ソフトボール(23.5)、バドミントン(15.9)
その種目の技術をいっそう高めたいので	野球(28.9)、硬式テニス(27.1)、バドミントン(12.1)
この種目なら人並にできると思ったので	陸上運動(22.9)、サイクリング(22.8)、ソフトボール(21.4)、バドミントン(18.1)
中学・高校の体育の授業で経験した種目なので	バレーボール(29.6)、ハンドボール(21.8)、バドミントン(15.4)
体力や運動能力を高めたいと思ったので	体操トレーニング(37.8)、水泳(25.0)
運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので	基本運動(27.4)
自分の身体条件(ケガや障害など)に適した種目なので	トリム運動(53.8)

表21 運動生活類型別にみた履修希望の理由

(%)

希望する理由	階層	Club 所属階層	Area 利用階層	Program 参加階層	Stay 階層
やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので		26.4	21.2	17.6	31.1
中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから		19.2	21.8	28.8	12.1
その種目の技術をいっそう高めたいので		15.3	15.5	8.6	6.0
この種目なら人並にできると思ったので		7.4	8.3	9.5	14.1
中学・高校の体育の授業で経験した種目なので		7.8	9.7	11.3	7.8
体力や運動能力を高めたいと思ったので		5.8	6.9	4.5	5.5
運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので		3.2	5.5	7.7	8.6
その種目について、もっと深く知りたいので		5.2	4.0	2.3	2.2

われるような種目が目立っている。

表21は、運動生活の階層ごとに、履修希望の理由についての割合を示したものである。Club所属階層とStay階層では“やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので”，Area利用階層とProgram参加階層では，“中学、高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから”という希望理由が最も多いが、Stay階層を除く他の三つの階層では順位の違いこそあれ、同じような希望理由となっている。特に、Club所属階層とArea利用階層は順位もほぼ同じであり、“その種目の技術をいっそう高めたいので”という理由においても、他の二つの階層に比べて割合が高く、運動に対する積極性がうかがえる。“この種目なら人並にできると思ったので”という理由ではStay階層の者の希望が多く、“その種目の技術をいっそう高めたいので”では、最も低いということなどからも、Stay階層の運動に対

する消極的な様子がうかがえる。しかし、Stay階層では、“運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので”という希望理由も多く、体力、運動不足を自覚して意図的にそれにあった開設科目を選択しようとしている学生もいることが考えられる。

表22は、運動生活の階層ごとに、ガイダンスにおいて履修したいと思った開設科目を示したものである。すべての階層において硬式テニスの希望者が最も多く、ライフル射撃も同様に希望者が多かった。バレーボールとバドミントンもすべての階層において希望者が多いが、各階層によって履修希望の理由に相違がみられるので、授業に期待することも異なり、運動量や技術レベルなどの問題から階層ごとに満足度に違いが生じる可能性もあるといえよう。また、サッカーではStay階層の者の希望が少なく、卓球ではClub所属階層の者の希望が少ないのは、それぞれの種目に

表 22 運動生活類型別にみた履修希望

(%)

	Club所属階層	Area利用階層	Program参加階層	Stay階層
1	硬式テニス (16.9)	硬式テニス (21.2)	硬式テニス (10.1)	硬式テニス (14.2)
2	バレーボール (8.5)	バレーボール (8.3)	サッカー (9.2)	ライフル射撃 (12.1)
3	ライフル射撃 (8.1)	ライフル射撃 (7.3)	バレーボール (9.2)	サイクリング (7.6)
4	ハンドボール (6.1)	バドミントン (6.4)	バスケットボール (7.4)	バドミントン (7.6)
5	バドミントン (5.1)	サッカー (5.8)	卓球 (7.4)	卓球 (7.4)
6	ゴルフ (5.1)	卓球 (5.5)	ライフル射撃 (6.5)	バレーボール (6.1)
7	サッカー (5.0)	バスケットボール (4.8)	ソフトボール (6.5)	体操トレーニング (5.0)
8	バスケットボール (5.0)	野球 (4.7)	水泳 (6.0)	水泳 (4.9)
9	野球 (5.0)	ソフトボール (4.1)	野球 (6.0)	バスケットボール (3.9)
10	水泳 (4.7)	サイクリング (4.1)	バドミントン (5.5)	基本運動 (3.2)

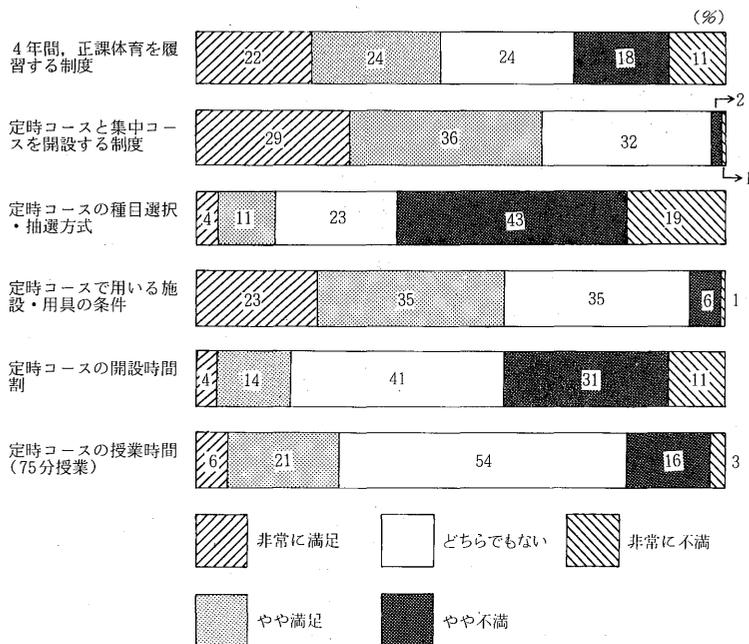


図 30 現行の正課体育に対する満足度

対して運動量の点から不満とするところが大きいからと考えられる。階層ごとにみているとClub所属階層, Area利用階層, Program参加階層では、ほぼ同じような球技系の種目に希望が多い。Stay階層では、他の三つの階層に比べて球技系の種目は少なく、サイクリング、バドミントン、卓球といった手軽に行えるスポーツ種目への希望が多い。また、Stay階層では体操トレーニング、水泳、基本運動といった体力向上を目的とする種目の多いのも特徴である。“運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので”という履修希望が反映していると思われる。

### 3) 定時コースにおける満足度

図30は、現在の正課体育の定時コースにおける満足度について示したものであるが、“定時コースと集中コースを開設する制度”や“定時コースで用いる施設・用具の条件”において学生が満足、支持しているということがわかる。“定時コースの種目選択・抽選方式”、“定時コースの開設時間割”において、不満と答えている者が多い。これは希望する種目が開講されていなかったり、受講人員等の関係から希望する種目を受講できない場合が多いためと考えられる。図31は、「四年間、正課体育を履修する制度」について運動生活の

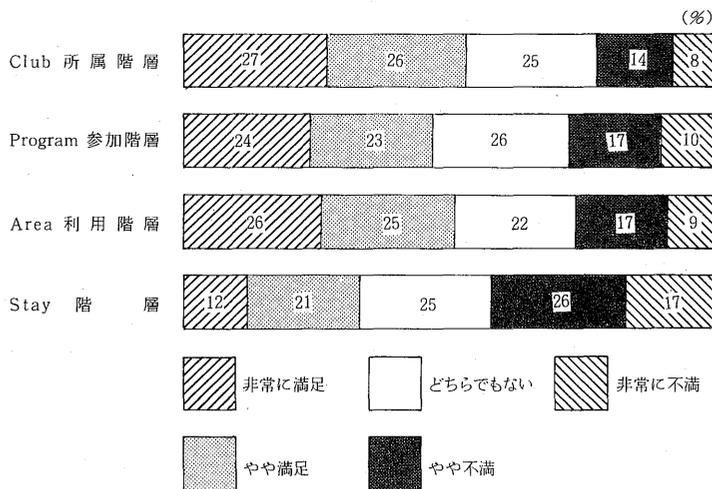


図31 「4年間、正課体育を履修する制度」について  
運動生活類型別にみた満足度

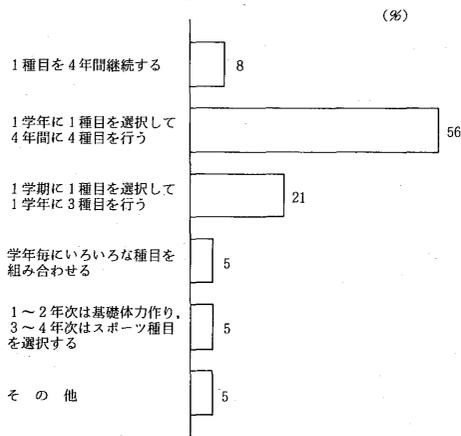


図32 正課体育の受講のしかたに対する意識

階層ごとに満足度を示したものである。Club所属階層からStay階層へと運動に対して消極的になるほど不満の割合が大きくなっている。Club所属階層、Area利用階層、Program参加階層の三つの階層では満足(非常に満足、やや満足)と答えている者が約50%みられるのに対し、Stay階層は満足が33%、不満が43%と不満が非常に多くなっている。これはStay階層の中に運動嫌い、運動に対する意欲を持たない学生が多く、四年間も正課体育を履修したくない、あるいは、正課体育はそれほど必要ではない、と考えている学生が多いことを

示している。“定時コースの開設時間割”においても同様な傾向がみられた。

図32は、定時コースにおける受講のしかたについて示したものである。“一学年に一種目を選択し、四年間で四種目を行う”が56%と過半数を占めているので、現在の受講のしかたは一応、学生に支持されていると考えていいだろう。

図33は、前年度受講した授業における各項目についての満足度を示したものである。“学習・指導のすすめ方”において67%の学生が満足と答えるなど、多くの項目において満足の割合が高いことなどが示されている。しかし、“運動技能の伸び方”については満足が37%、不満が26%であり、満足度が最も低かった。Club所属階層やArea利用階層では、“その種目の技術をいっそう高めたいので”という理由が多く、学習経験を深めるにつれて技能ののび方に注目してきていることがうかがえる。また、それぞれの授業における学生の技能レベルに違いがあることも関連していると思われるが、“学習・指導のすすめ方”や“運動技能の練習方法”については満足と答えている者が多いので、自己に対する厳しさや自分の技能ののびに対するもどかしさか

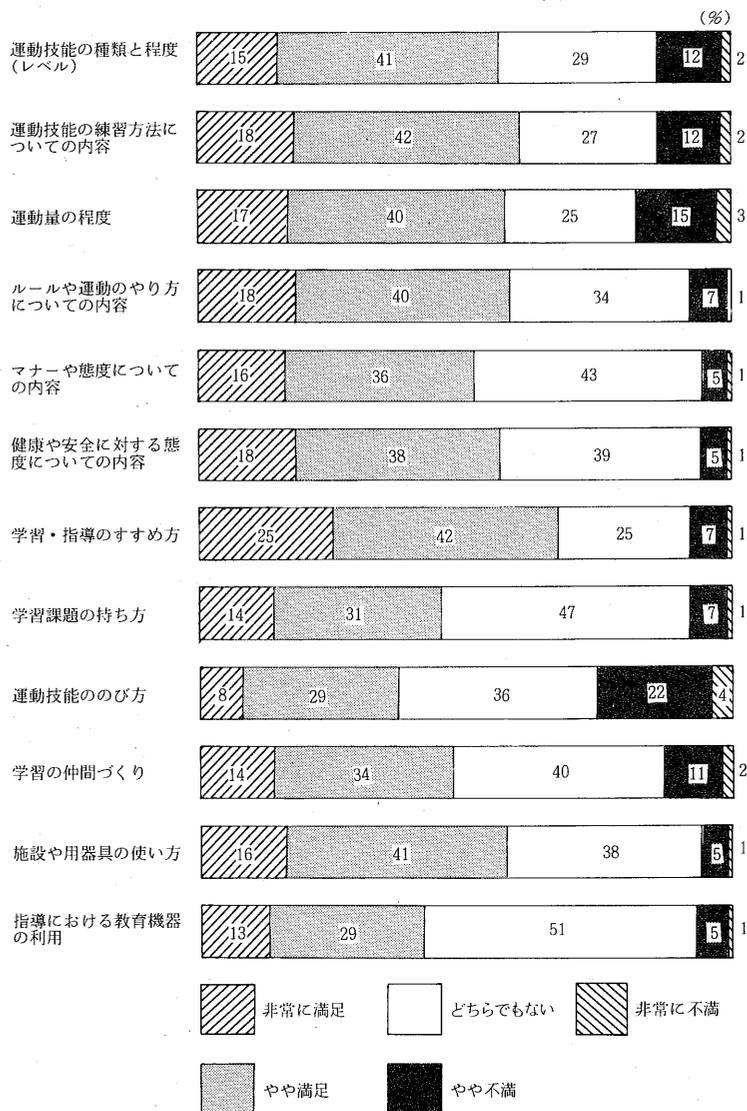


図33 前年度受講した授業における満足度

らの不満とも考えられる。

### 要 約

大学における学生の運動生活の様相は、学内の体育事業と密接に関連している。したがって、体育経営体の立場から体育事業を見直し、その改善の手がかりを得るためには、運動者としての学生の日常生活における運動行動をとらえておく必要がある。

本調査の目的は、正課体育を履修している

3,150名の学生の運動生活を質問紙法によって調査し、学生が日常生活の中で意図的に運動することをどのように取り入れているか、また各種の体育事業にどう対応しているかを把握することであった。本調査における体育事業や運動生活のとらえ方は宇土<sup>3)</sup>の理論に依拠したものであり、運動生活の階層的なとらえ方が用いられた。

調査の結果は以下のように要約される。

1) 学生の運動生活を階層的にとらえると

Club所属階層41%，Area利用階層23%，Program参加階層8%，Stay階層29%であった。したがって、Stay階層を除いて全体の約70%の学生は、週1回の正課体育時の運動に加えてさらに何らかの意図的な運動を生活の中で実施しているとみられる。

2) 運動生活階層の経年的変容は次のようであった。Club所属階層では、男子49.2%から36.7%へ、女子37.2%から27.9%へとしだいに減少し、Program参加階層もまた学年進行につれてやや減少した。一方Area利用階層は、学年が進むにつれて増加し、とくに4年次での増加が著しく男女とも全体の27~28%となった。Stay階層は、男子22.8%から27.3%へ、女子27.1%から42.6%へ、学年が進むにつれて増加した。もっとも消極的なStay階層の増加にどう対処するかが、今後の体育事業にとって重要な課題となった。

3) 運動者の健康や体力・運動能力に対する自己評価と過去のスポーツに対する姿勢を運動生活階層別にみると、運動に対して消極的な階層ほど、健康や体力の水準は低く、過去のスポーツに対する姿勢が消極的であったことが明らかにされ、運動者の主体的な条件が運動生活の様相に反映していることが示唆された。

4) Club所属階層について運動実践の継続性の面から運動者行動の実質性・形式性を吟味してみると、Club所属階層の47%は週に3日以上練習をしている実質的なClub階層であったが、そのうちの16%はあまり練習をしない形式的Club階層であった。そして、実質的なClub運動者の方が形式的な運動者よりもクラブ活動に対する満足度が高く、望ましい活動をしていることが明らかになった。

5) Area利用階層の施設利用概況は、近隣の道路や広場などの関係の運動施設や宿舎附近のテニスコートの利用が多く、次いでトレーニング室、室内プールなど一般開放されている施設がよく使用されていた。そして、休

日や授業のあき時間に、簡易なゲームや手軽な練習を行っており、その利用頻度は月に1~2度ないし週に1~2度であった。

6) スポーツデーにおける各種の競技プログラムに参加している学生は、全体の44%であり、その多くはクラブに所属したり、自由時に施設を利用したりして運動にかなり積極的であった。しかし、階層区分によるProgram参加階層(第3階層)のみの割合は全体の11%であった。学内のスポーツプログラムへの参加は集団スポーツ種目への参加が多く、その過程には2つのパターンがみられた。1つは仲間とさそわれ交友関係を広げようとチームスポーツに出場する集団参加型であり、もう1つは個人の意志と目的を持って参加する個人参加型であった。

7) Stay階層は全体の29%であり、男子では4人に1人、女子では3人に1人の学生が消極的なStay階層であった。またStay階層は他の階層と比較して体力や運動能力の水準が低く、過去のスポーツ体験も少なく、各種の体育事業に対して多くの抵抗条件を有していることが示された。さらに正課体育への対応においても他の階層より消極的であった。

8) 正課体育の履修を契機とする各種体育事業への対応をみると、正課体育での運動の学習をきっかけとしてクラブに所属するようになった学生は2.7%にすぎなかったが、プログラムに参加したり、自由時にエリアを利用するようになった学生は、全体の15%であり、プログラム・サービスやエリア・サービスがより積極的な運動者行動を引き出していることが示唆された。

9) 正課体育の4年間履修に対して、満足と答えた学生は46%であり、「どちらでもない」(24%)を含めて全体の70%は4年間履修制度を評価しているとみられる。しかし、29%の学生は不満と答え否定的な対応を示していた。また、正課体育の定時コースと集中コースの制度や施設・用具の条件に対する満足

度は高いが、受講時の種目選択の方法に対する不満が多く示された。

10) 各種の体育事業への対応について、その抵抗条件や要望が運動生活階層との関連で調べられた。それらの結果はこれからの体育事業のあり方を検討する上で有効な資料となり、改善すべき多くの問題を指摘するものであった。

#### 文 献

- 1) 宇土正彦：体育管理学 p.102～103, 大修館書店, 1970.
- 2) 宇土正彦：体育管理学 p.105, 大修館書店, 1970.
- 3) 宇土正彦：体育管理学 p.101～156, 大修館書店, 1970.
- 4) 山川岩之助ほか：筑波大生の運動生活調査, 大学体育研究, 第4号, 第3章 p.131～200, 1982.
- 5) 宇土正彦：体育管理学 p.133～134, 大修館書店, 1970.
- 6) 宇土正彦：体育管理学 p.139, 大修館書店, 1970.
- 7) 福岡県体育研究所：高校生の運動生活に関する調査 — 運動階層分布 —, 福岡県体育研究所報告書, 1982.
- 8) 椿本昇三, 浅井 武, 寄金義紀：運動生活階層別にみた筑波大学学生健康への意識と体力・運動能力との関係, 大学体育研究, 第5号 p.65～72. 1983.
- 9) 宇土正彦：体育管理学 p.118～121, 大修館書店, 1970.
- 10) 宇土正彦：体育管理学 p.68, 大修館書店, 1970.
- 11) 寄金義紀, 松下雅雄：筑波大学体育施設の利用状況, 大学体育研究, 第5号 p.101～122, 1983.